慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グレゴリゥス改革とバィエルン・ 前編 : 歴史的地域研究試論
Sub Title	Gregorianische Reform und Bayern. I. Teil : ein geschichtlich-landeskundlicher Versuch
Author	森田, 茂(Morita, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.33 (2001. 9) ,p.51- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20010930-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グレゴリゥス改革とバィエルン
前編
——歴史的地域研究試論——

森田　茂

はじめに

本稿は，中世最大の宗教的・政治的・社会的変動とされるグレゴリゥス改革及び叙任権闘争にバィエルンがどう関わったか，を中心的に扱う。その前史として，1. カーロリング朝とバィエルン，及び，2. オットー朝とバィエルン，で，東フランク王国及びバィエルンの歴史を概括するが，955年までの事象については筆者による本紀要第27号「バィエルン公国の成立」，第28号「タシロ三世とカール大帝」，第31号「マジャール人と中世前期のバィエルン」並びに第32号「再論：タシロ三世」を参照されたい。これに続いて，3. バィエルンとキリスト教，で，バィエルンにおけるキリスト教の伝播及び教会組織等を巡る諸問題を，便宜的にAからJまでの10項目に分けて，観察した上で，4. ザーリァ朝とグレゴリゥス改革，に移り，ローマ教皇グレゴリゥス7世に因んでその名が付けられたグレゴリゥス改革，叙任を巡る諸問題，及びそれらへのバィエルンの関わりについて述べる。最後に，5. 皇帝バルバロッサとバィエルン太公オットー1世，で，バィエルンが1918年まで続くヴィテルスバハ家を1180年に太公家として迎えるに至る状況を概観する。

以上に基づき140ページ程の原稿を完成させたが，日吉紀要刊行委員会編集委員から，量的に限度を超えるので分載の方針を了解して欲しい，との要請があった。それに応えて本号では前半部3. までを掲載する。

1. カーロリング朝とバィエルン

現バィエルン州の占める面積はドイツ連邦共和国中で最大，紀元後600年前後から1918年まで綿々と一連の支配者がこの地に君臨した。時代によって彼らの支配地域の拡大縮小はあったにせよ，レヒ河 Lech，ドナウ河 Donau，ボヘミア山地 Böhmerwald，イン河－ザルツァハ河 Inn－Salzach 及びアルプスの裾野に囲まれた五角形地帯，という大枠はバィエルンであり続けた。ある地域の歴史を辿る場合，時代を遡れば遡るほど，支配者に関する情報が民衆に関してのそれより多く残される。従って，バィエルンの歴史を振り返る場合も，文献及び建築物，副葬品等，広義の文化財に依拠するなら，必然的に支配者の系譜或いは交替に的を絞らざるを得ない。そのような制約を前提にして，フリードリヒ1世バルバロサ（赤髭王）に至るまでのバィエルンの歴史を纏める。

バィエルン人の先祖はバユヴァーレン Bajuwaren と呼ばれる。どこから彼らがこの地に来たか，どのような集団からどのようにしてこの地で一つの部族体が形成されたかは明らかではないにせよ，彼らは6世紀初頭にヨーロッパの歴史に登場する。彼らは嘗てのローマ属州ノーリクム Noricum とラェティア Raetia を住地とした。ドナウ河，イーザル河 Isar，イン河，トラゥン河 Traun 流域の肥沃な地域には，濶葉樹林や原生林，湿地や険しい山地が広がる。この地域にはローマの手に成った道路網や軍事施設もあり，エンス Enns 河口のロルヒ Lorch，ザルツブルク Salzburg，パッサゥ Passau や一際輝くレーゲンスブルク Regensburg などの都会もあった。バユヴァーレンは，ケルト人，及びケルト人と混血していたラテン系人 Romanen を先住民に持ち，彼らは，これら先住民を奴隷・半自由民として利用し，見下していた，という側面が嘗ては強調されたが，最近の研究で，ラテン系人からバユヴァーレンは葡萄栽培或いは牧畜に関する知識を仕入れ，石造建築の技術を習得，更にはラテン系人地主の許で小作人としても働き[1]，これらラテ

1) Friedrich Prinz, Bayern zwischen Antike und Mittelalter, in: Bayern-

ン系人は初期のバイエルン太公国 Herzogtum Bayern の文書作成担当者でもあったこと等が明らかにされている[2]。バユヴァーレンの部族法「バイエルン部族法典 Lex Baiuvariorum」は8世紀に成立したと推定されている[3]。アギロルフィング家 Agilolfinger に太公位の相続を保障したこの法典，豊かな自然，ローマの残滓，先住民との宥和をバックに，バイエルン人はその地歩を固めて行く。

バイエルン人は既に，どの程度までかは不明なものの，キリスト教カトリック信徒になっていたようである。かと言って彼らは西方のフランク王国 Frankenreich に牛耳られることは望まず，東方への発展を目指す。初期のアギロルフィング家の支配者については漠たることしか分らないが，ランゴバルド国王とバイエルン太公の間に接点があったことは確実で，文献上把握できる最初のバイエルン太公ガリバルド1世 Garibald I.（在位555以前–591?）は，ランゴバルド国王ヴァホ Wa(c)ho（在位510?–†540?）の王女ヴァルデラーダ Walderada を妃に迎えていた。彼女はフランク国王テゥデバルド Theudebald（在位548–555）の未亡人。ガリバルドはヴァルデラーダとの間の下の息女テゥデリンデ Theudelinde 或は Theodelinde，つまりヴァホの孫娘を当初フランク国王ヒルデベルト2世 Childebert II.（在位575–596）と婚約させるが，彼女は589年ランゴバルド国王アゥタリ[4] Authari（在位584–590）に嫁ぎ，

---

spiegel, Nov./Dez. 1987/Nr.6, München. S.9ff.

2) Joachim Jahn, Ducatus Baiuvariorum. Das bairische Herzogtum der Agilolfinger, in: Monographien zur Geschichte des Mittelalters, hg. von Karl Bosl, Bd. 35, Anton Hiersemann, Stuttgart, 1991. S.559.

3) この「法典」の成立時期については様々な論議があり，630年頃，728年，744–748年頃，とする主張が目立つ。

4) フランク王国との関係は微妙だった。568年，それまでパンノーニア Pannonia とノーリクムに居住していたランゴバルド人 Langobarden がその居住域を放棄してイタリアに侵入，瞬く間に北イタリア一帯を占拠した。ランゴバルド人のこのイタリア侵攻はアヴァール人 Awaren やスロヴェニア人 Slowenen のパンノーニアやノーリクムへの進出を結果すると同時に，東ローマの敵意を買い，更にイタリア進出を断念していないフランク王国の敵愾心を煽る結果を生んだ。575年フランク人 Franken はイタリアに軍を進める。これはランゴバルドのト

アゥタリの死後，ランゴバルド王位を継いだアギルルフ Agilulf（在位 590–615/616?）と結ばれる。テゥデリンデはアリゥス派キリスト教 Arianismus をも受け入れていたランゴバルド人をカトリック信仰に改宗させることに努力し，ローマ教皇グレゴリゥス 1 世 Gregorius I.（在位 590–604）から絶賛される。バィエルン太公国はローマ教皇座とも良好な関係を保持する。

ガリバルドの子息タシロ 1 世 Tassilo I.（在位 591?–610）はバィエルン東部に侵入して来る諸民族からバィエルンを防衛する。その子息ガリバルド 2 世 Garibald II.（在位 610–640?）も防衛に専心する。660 年頃バィエルン人は現在の下オーストリア Niederösterreich 地域に領土の拡大を図るが，アヴァール人に逆襲される。一方，エンス河及びトラゥン河にはカランタニア Karantanien のスロヴェニア人が入り込んで来る。アギロルフィング家のテーォド Theodo（在位 680?–717?）は，715/716 年にローマを訪れバィエルンの教会組織建設について教皇グレゴリゥス 2 世 Gregorius II.（在位 715–731）と話合う。伝記記述者のフライジング Freising 司教アルベォ Arbeo（在職 764/765–†783）の記した「コルビニアーヌス伝 Vita Corbiniani」によれば，テーォドは，ローマに旅立つ前に四人の子息テーォデベルト Theodebert，テーォドァルド Theodoald，グリモァルド Grimoald，タシロ 2 世 Tassilo II. に領土の分割を決めた[5]が，テーォデベルト，テーォドアルド，タシロ 2 世が早世したため，最終的には 720 年頃グリモァルドと，テーォデベルトの子息フクベルト Hucbert 或は Hugibert（在位 725/28?–736?）の二人が太公領を分割してバィエ

リエント公エーヴィン Ewin von Trient によって打ち破られる。このエーヴィン公がガリバルド 1 世の息女（名は不明）と結婚するに及び，バィエルン人とランゴバルド人の結合が深まり，反フランク王国連合の色彩を濃くする。584 年フランク王国は再度ランゴバルドを攻撃する。この攻撃はビザンティン帝国の傭兵としてであった。このような東西からの挟撃にあって，574 年から 584 年まで王位に空白があったランゴバルド人はアゥタリを王に戴いた。

5) コルビニアーヌス Corbinianus（*700 以前–†728/730）についての伝記：F. Brunhölzl (übersetzt), Bischof Arbeo von Freising. Das Leben des heiligen Korbinian (lat.-dt.), in: hg. v. H. Glaser, F. Brunhölzl, S. Benker, Vita Corbiniani, Verlag Schnell & Steiner, München・Zürich, 1983. S.109.

ルンを統治することになる。しかしこの両者間には対立が絶えず，それがメーロヴィング朝フランク王国宮宰カール・マルテル Karl Martell（在職 720 以前–741）にバィエルン干渉のきっかけを与える。カール・マルテルは 725 年と 728 年に軍を率いてバィエルンに乗り込み，スワーナヒルト Swanahilt（グリモァルドの妻ピリトルード Pilitrud の姪とも言われる）をフランク王国に連れ帰って妻とし，バィエルン併合への足場を築く。フラィジングを統治していたグリモァルド（在位 *?–†725/728?）はこの間に暗殺される。カール・マルテルの支援を受けたフクベルトが全バィエルンを統治するが，彼は男系子孫を残さなかったため，アレマニア Alemannien 系アギロルフィング家出身の太公オーディロ Odilo 或は Oatilo（在位 736?–748）がその後継者となる。スワーナヒルトを通してカール・マルテルとも良好な関係を結んだオーディロは，739 年，太公テーォドの遺志を継いでバィエルンに，ザルツブルク，レーゲンスブルク，フラィジング，パッサゥの 4 司教区から成る教会組織を完成させる。740 年頃，アヴァール人に圧迫されたカランタニア人はオーディロに救援を求める。するとオーディロは援軍を送ってアヴァール人を打ち破り，カランタニアを自らの支配下に置き，キリスト教の伝播に努める。カランタニア部族侯ボールト Boruth（†750）の後を継いだ子息カカーティゥス Cacatius（在位 750–753）と甥ヒェィトマル[6] Cheitmar（在位 753–769?）は既

6) Herwig Wolfram (hg.), Conversio Bagoariorum et Carantanorum – Das Weißbuch der Salzburger Kirche über die erfolgreiche Mission in Karantanien und Pannonien (lat.-dt.), Hermann Böhlaus Nachf. Wien-Köln-Graz, 1979.（この書は聖ルペルトゥス［本稿 93 ページ参照］のバィエルン到着［695/696 年］頃からアーダルウィン Adalwin のザルツブルク司教時代［865 年］までを記録）S.43 及び Lexikon des Mittelalters, Studienausg., Verlag J. B. Metzler, Stuttgart-Weimar, 1999（以下 LMA と省略），Bd. V, Sp.1003 によれば，オーディロに救援を求めたカランタニア太公ボールトはオーディロの支配に服し，子息カカティゥス及び甥ヒェィトマルを含む人質をオーディロに差出す。この二人の人質はキームゼー僧院 Chiemseekloster で教育を受ける。743 年オーディロがフランク人に敗北した後，カランタニアはフランク王国の高権下に入る。

にキリスト教徒であった。ヒェィトマルの死後，キリスト教の芽生えが脅かされる。スラヴ勢力が再びバィエルンに迫った 772 年，オーディロの子息タシロ 3 世 Tassilo III.（*741–在位 748–788–†794 以後）が大きな戦果を挙げる。即ち，彼はカランタニア内のスロヴェニア人異教徒の暴動を制圧する。これを「ザルツブルク大年代記 Annales Iuvavenses maximi」は，同年のカール大帝によるザクセン人 Sachsen のイルミーンズル[7]破壊に匹敵する快挙，と称え，タシロはキリスト教世界における最高の支配者の一人[8]，コンスタンティン大帝 Constantinus der Große の再来，と賞揚される。この時，カランタニア，即ち現在のケルンテン Kärnten のキリスト教化と西方勢力への従属化が決定づけられる。しかし 784 年，カール大帝とタシロ 3 世の関係が決定的に悪化する。アルプス南麓のボーツェン Bozen でフランク軍がバィエルン軍に襲いかかったのである。787 年，タシロ 3 世は，その上部先端に人間の姿を象ったアギロルフィング家伝来の笏，バィエルン太公の支配権の象徴たるこの笏をレヒ河畔の古い墓丘に立ってカール大帝に手渡し，家臣誓約を行なうが，翌 788 年，カールによりタシロはバィエルン太公の座を追われ，剃髪され，僧院に幽閉される。794 年，フランクフルト Frankfurt の王国会議で，タシロ 3 世はバィエルン太公国に対して持つすべての自らの権能及び資産の放棄を宣言させられる。以後タシロについての情報はまったく途絶える。未だに死亡年すら分らない。

太公オーディロ及びタシロ 3 世の時代においては，カール大帝のザクセン人圧伏同様，キリスト教化とフランク王国への服属化は車の両輪で，これは宗教的・政治的・経済的相互波及効果を生み出した。太公オーディロが 739

---

7) Heinrich Löwe, Deutschland im fränkischen Reich, in: Gebhardt, Handbuch der Deutschen Geschichte, 9., neu bearbeit. Aufl., hg. von H. Grundmann, Bd. 1, erster unveränderter Nachdruck, Union Verlag Stuttgart, 1973. S.171 によれば，ザクセン人の崇拝する Irminsul は彼らの部族支配の柱であり象徴であり，部族の政治的，宗教＝祭祀的秩序と密接に結び付けられていた。

8) Herwig Wolfram (hg.), Conversio, S.283, Anm.492.

年に僧院カムミュンスタ Chammünster, 741年に僧院ニーダアルタイヒ Niederaltaich を建立したのも，北部山地[9] Nordwald の開拓と植民を考えてのこと。太公タシロ3世が769年プスタ河谷 Pustertal に僧院イニヒェン Innichen（現イタリア領内），777年に僧院クレムスミュンスタ Kremsmünster（現オーストリア領内）を開いたのもこれと同根と言える。

バイエルンの無血統合を果たしたカール大帝は，3人目の妻としてアレマニアの豪族の出であるヒルデガルド Hildegard（*?–†783）を妃に迎えていたが，大帝は彼女の兄弟ゲーロルド伯 Graf Gerold（在職 788–799）をバイエルン代官 praefectus Bavariae に任ずる。これによりバイエルン太公国は決定的にフランク王国の属州に転化する。アヴァール人は，タシロ3世の僧院入り後，恐らくタシロ3世に対するカール大帝の遣り口に反発してであろう，バイエルン地域を襲撃する。しかし強力なフランク軍に押し返される。798年，ザルツブルクにバイエルン大司教区が設置され，その初代大司教にバイエルン人豪族の一人でカール大帝に「誠実な」アルン Arn[o]（*740 過ぎ–司教 785–大司教 798–821）が任命される。国内体制を整えつつ，その後，カール大帝はアヴァール人を間断無く攻め，803年，彼らに決定的な打撃を与えるものの，その戦闘でゲーロルド伯は戦死する。その後任にカーロリング家と縁戚関係が推定されるアゥドゥルフ伯 Graf Audulf（在職 799–818?）がなる。814年，カール大帝は死去する。カールに叛旗を翻した長男屈背のピピーン Pippin der Bucklige（*770 以前–†811，カールの最初の妻ヒミルトルード Himiltrud との間の長子）は既に僧院で死去，ヒルデガルドとの間にできた最初の子，次男カール・ジュニァ Karl der Jüngere（*772/73–†811），三男ピピーン Pippin（旧名 Karlmann, *777–†810）も既に亡く，残った男子は四男ルートヴィヒのみ。彼，即ちルートヴィヒ1世敬虔帝 Ludwig I. der Fromme（在位 813/14–840）がカール大帝の後を継ぐ。敬虔帝は，長男ロータル Lothar にバイエルンを

9) 当時の北部山地とは，現在のヴァルトシュタィン山塊 Waldsteingebirge，シュタィン山地 Steinwald，上パルツ山地 Oberpfälzer Wald，ボヘミア山地等，現バイエルン東北部州境にある山塊地帯の総称。

与え，バィエルンを部分王国（＝分割王国）とする。今やバィエルンは代官にではなく王によって支配される。これはバィエルン人に自らの居住域を自立的「国家」と意識するきっかけを与える。817年の帝国整序令 Ordinatio imperii に基づき敬虔帝は三男で当時11歳のルートヴィヒ，後のルートヴィヒ2世ドイツ人王 Ludwig II. der Deutsche（*806?–国王817–†876）をバィエルン国王に任ずる。彼は825年親政を開始する。彼は，父王敬虔帝がシュヴァーベンをルートヴィヒの異母弟カール2世禿頭王 Karl II. der Kahle（*823–皇帝875–†877）に与えようとしたとき，父王に叛旗を翻してシュヴァーベンを獲得してしまうような血気にはやった国王。843年のヴェルダン条約 Vertrag von Verdun で，敬虔帝の三男カール禿頭王は西フランク王国 Westfränkisches Reich を，次男ルートヴィヒ2世ドイツ人王は東フランク王国 Ostfränkisches Reich を，長男ロータル1世 Lothar I.（在位817–855）は帝位とイタリアを含むロートリンゲン Lothringen 及びプロヴァンス Provence 等の中部王国を相続することが協定され，ルートヴィヒは正式に東フランク王国国王の座に即く。彼は東方にも積極的に勢力を伸ばし，874年までにモラヴィア Mähren，ボヘミア Böhmen をも支配下に置く。ルートヴィヒの支配域の拡大によりバィエルンに代官が必要とされ，ルートヴィヒの長男カールマン Karlmann の義父エルンスト伯 Graf Ernst（在職 ?–861）が代官に投入される。ルートヴィヒは活動の拠点をレーゲンスブルクに置く。バィエルンは彼の支配の根拠地となり，レーゲンスブルクの繁栄の基礎はルートヴィヒ・ドイツ人王によって置かれた，と言える。彼は，所謂「ドイツ」を基盤にして統治を進めた最初の王で，「ドイツ人王」と呼ばれるに相応しく，広い視野を持ちつつ「ドイツ」を愛した国王であった。

ルートヴィヒ2世ドイツ人王の死後，王位を継いだ彼の長男カールマン（在位876–†880）は「バィエルン王」を名乗り，877年にはイタリアをもその支配下に置き，バィエルンとイタリアの結合を強める。彼はカランタニアの統治を庶子アルヌルフ Arnulf von Kärnten に委ねる。カールマンは程なくして死去，東フランク王国はその弟ルートヴィヒ3世ジュニァ Ludwig III. der

Jüngere（*?–†882）の支配下に入る。が，この王も直ぐに死に，その弟カール3世肥満王 Karl III. der Dicke（*839–退位 887–†888）を王に仰ぐ。カール肥満王は，当初，最小の領国を相続したものの，兄たちやカール禿頭王の子孫の相次ぐ死により，彼らの領国すべてが彼の支配下に集まり，結果的にイタリアをも含む東西フランク王国全土の支配者になり，更には皇帝にもなる。カール大帝時代の領国を一手に収めたカール肥満王にしてみれば，バィエルンなど物の数にも入らない。彼は，バィエルンを代官エンギルデォ伯 Graf Engildeo（在職 ?–895）に，ドナウ地域を代官アリボ辺境伯 Markgraf Aribo に委ね，カランタニアはアルヌルフに引き続き任せるだけで，バィエルン及び東方領域の統治ヴィジョンを何ら示さない。遂に 887 年 11 月アルヌルフは，バィエルンやスラヴの豪族の支援を得てクーデタを起こし，カール3世肥満王を王座から追い落とし，広大な東西フランク王国国王になる。アルヌルフ（在位 887–皇帝 896–899）は分裂状態にある西フランク王国には目も呉れない。専ら東フランク王国情勢の安定に意を用いる。祖父のルートヴィヒ2世ドイツ人王同様，レーゲンスブルクに統治の本拠を置き，東方の安定化に意を用いる。同時に 891 年レーヴェン[10] Löwen でヴァィキンガーにも勝利を収め，ロートリンゲンと東フランケンをノルマン勢力から解放しその名声を上げる。彼は，バィエルンの東部辺境域において謀反を企てた代官エンギルデォ伯[11]を粛清し，バィエルンの辺境域（Nordgau, Donaugau, Kärnten,

10）現在のベルギー地域。

11）Karl Brunner, Oppositionelle Gruppen im Karolingerreich, in: Veröffentlichungen des Instituts der österreichischen Geschichtsforschung, Bd. XXV, Hermann Böhlaus Nachf. Wien-Köln-Graz, 1979. S.142ff. u. 160ff. によれば，エンギルデォ伯の前任者エルンスト伯は，バィエルンの東方辺境域を独立させその支配者になろうとした東部辺境代官カールマン（国王ルートヴィヒ・ドイツ人王の長男）の策謀に巻き込まれる。これが発覚して，ルートヴィヒ・ドイツ人王は 861 年長男カールマンとエルンスト伯を解職し，その後任にエンギルデォ伯を任ずる。彼はノルトガゥのロードルド伯 Graf Rodold の後継者，恐らく子息，と目されている。しかしエンギルデォ伯は，895 年ルートヴィヒ3世ジュニァの娘，即ち国王アルヌルフの従姉妹ヒルデガルド Hildegard と結ん

Oberpannonien）をルーィトポルド伯[12] Graf Luitpold（在職 895-†907）に委ねる。アルヌルフは 896 年皇帝になるが，その 3 年後に死去する。後を継いだのは彼の 7 歳の子息ルートヴィヒ 4 世幼童王 Ludwig IV. das Kind（*893-在位 900-†911)。彼の治世は東西フランク王国が最大の危難に直面していた時期に当たり，騎馬民族マジャール人 Magyaren が西方世界を股にかけて劫掠の限りを尽していた。所詮，この幼童王にその対策を求めること自体，不可能事。カーロリング朝フランク王国は幼童王の死と共に歴史におけるその役割を終える。

嘗てメーロヴィング朝諸王の衰微し行く勢威がバィエルンのアギロルフィング家に大きな活動の余地を与えたと同じように，カーロリング朝最後の国王ルートヴィヒ 4 世幼童王もその王権の弱体化を如実に示しため，ザクセン人，フランク人，シュヴァーベン人 Schwaben の主体性は強まる。バィエルンではルーィトポルド伯が，マジャール人問題で何ら有効な対抗手段を見出し得ない幼童王政権を支えつつ，着々と具体的対策を打ち出し，例えば，900 年にエンス Enns 左岸に要塞エンスブルク Ennsburg の新設に着手する。術策にも長じていたルーィトポルドは，902 年，ハンガリー軍指導部を宴会に招いて彼らを皆殺しにしたり，またボヘミアを攻めて 903 年にはボヘミア

で国王に叛旗を翻したとされ，アルヌルフによりヒルデガルドと共に不誠実の罪で処断された。ところで国王アルヌルフは，ルートヴィヒ・ドイツ人王の長男カールマンとエルンスト伯の娘で側室 Friedelfrau（Wilhelm Störmer, in: LMA, Bd. III, Sp.2177 によれば正室 Frau）のリゥツヴィンド Liutswind との間にできた男子で，既述のようにカール 3 世肥満王からクーデタにより王位を簒奪した当の本人。

12）ルーィトポルドは皇帝アルヌルフの母リゥツヴィンドを介してアルヌルフと姻戚関係にあると言われる一方，LMA, Bd. V, Sp.2206f. によれば，カーロリング家との系譜関係は明確ではなく，辺境伯ルーィトポルドがその一族にルーィトポルド家 Luitpoldinger という名を与え，ルーィトポルド家はフランク王国の豪族の一家系，とされる。更に Karl Brunner, Oppositionelle Gruppen, S.162 によれば，ルーィトポルドの先祖についてはまったくと言って良いほど何も分らない，とのこと。

太公[13] dux Boemanorum にもなったり，フランケン地域の覇権を巡るバーベンベルク家 Babenberger とコンラート家 Konradiner の血で血を洗う「バーベンベルク家の私闘 Babenberger Fehde」に干渉，バーベンベルク家当主アーダルベルト Adalbert を騙し討ちにして 906 年にコンラート家を勝利に導いたりもした。ルーィトポルドは，皇帝アルヌルフ及びその子息ルートヴィヒ 4 世幼童王に代ってバィエルンを見事に統治したが，そのルーィトポルドも，907 年，プレスブルク Preßburg 近傍でのハンガリー人 Ungarn（＝マジャール人）との戦いで他の多くの伯や三人の司教と共に落命する。この戦いはバィエルン史上最大の国難の一つであった。

ルーィトポルドの後を襲ったのはその子息アルヌルフ悪玉公[14] Arnulf der Böse（在職 907–937）。彼は父と異なり，王命を待たずに自ら「神の恩寵によりバィエルン及び近隣を支配する太公アルヌルフ Herzog Arnulf」と名乗る。彼は劫掠する騎馬民族ハンガリー人と戦う。戦士に封土を授けるため太公アルヌルフは，その機能を停止していたり無人と化した僧院・教会を没収する。このため，彼は年代記者から「悪玉公」という呼び名を頂戴する。911 年 11 月，フランケン出身のコンラート家のコンラート 1 世 Konrad I.（在位 911–918）が東フランク王国王位に即く。カーロリング家出身の国王との離別である。913 年の対ハンガリー戦でアルヌルフと共にハンガリー人を叩いたのは，アルヌルフの母クニグンデ[15] Kunigunde（シュヴァーベン出身）の二人の

13） LMA, Bd. V, Sp.2206.

14） ルーィトポルドはその子息にカーロリング家の皇帝アルヌルフの名を与えていることから，ルーィトポルド家とカーロリング家の姻戚関係も想定し得る。

15） Kurt Reindel, Bayern vom Zeitalter der Karolinger bis zum Ende der Welfenherrschaft (788–1180), in: Max Spindler (hg.), Handbuch der bayerischen Geschichte, Bd. I, zweite, überarb. Aufl., München, Beck, 1981.（以下 K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, と省略）S.283 によれば，コンラート 1 世は 913 年，ルーィトポルド伯の未亡人でアルヌルフの実母クニグンデと結婚している。従ってエルヒァンガーとベルトルドはコンラート 1 世の義兄弟。

兄弟エルヒァンガー伯 Erchanger（†917）とベルトルド伯 Berthold（†917）であった。悪玉公はハンガリー人と何らかの協定に達したのであろう，その後13年間バィエルンは彼らの襲撃を受けずに済む。国王コンラートにしてみれば，強力なバィエルン人とシュヴァーベン人のこのような軍事協力の成立はまったく不都合であった。そこで914年，コンラートは悪玉公に攻撃を仕掛ける。と，悪玉公は嘗ての敵ハンガリー人の許に逃げ込む。しかし917年，悪玉公はレーゲンスブルクに戻り悪玉公の後釜に座っていたコンラートの弟エーバハルド Eberhard を追い出す。が，シュヴァーベンの二人の叔父は処刑されてしまう。918年12月，悪玉公は国王軍を打ち破る。コンラートはその時の受傷が原因で死去する。

2. オットー朝[16]とバィエルン

919年5月ザクセン出身のハィンリヒ1世 Heinrich I.（在位919–936）が国王に選出されるが，アルヌルフ悪玉公もバィエルンで国王に選出される。どちらが本命かは異論のあるところ。兎も角ハィンリヒ1世は統治態勢を固めるため悪玉公との交渉に入り，言わば悪玉公を一国の君主同等に扱って彼に王権を放棄させる。ザクセン人ハィンリヒ1世が国王になったのを見て，ハンガリー人はザクセンに矢を向ける。そんな時ハンガリー軍高官が捕虜になる。これをきっかけにハィンリヒはハンガリー人と交渉を持ち，926年，9年間の平和協定を結ぶ。ハンガリーの脅威から解放されたハィンリヒは国内防備態勢を固めると共に，対外的にも多くの成果を挙げる。悪玉公も彼に協力しボヘミアに出兵する。しかしその後バィエルンもハンガリー軍に襲われたため，悪玉公は彼らとの協定を更新する。933年ハンガリーの使者がハィンリヒの許に貢納金を受け取りに来るが，素っ気無く断られる。すると直ち

16）オットー朝とは，ハィンリヒ1世に始まり，オットー1世，オットー2世，オットー3世，ハィンリヒ2世までの東フランク王国国王を輩出したザクセンのリゥドルフィング家の王朝を言う。ザクセン朝，リゥドルフィング朝とも呼ばれる。

にハンガリー軍は掠奪行を組織する。ハィンリヒ1世はこれを迎え撃つ――リァデの戦い Schlacht bei Riade である。充分に準備を重ねたハィンリヒ1世側の一方的な勝利，ハィンリヒの令名は，同じくハンガリー人の掠奪に悩まされていた遙か西方にまで轟く。王国の強化を考えていたハィンリヒは929年，王位継承等について王族と約定[17]を行い，メーロヴィング朝以来綿々と続いて来た分割相続を廃止し，王国及び王位を彼の二人目の妻マティルデ Mathilde との間に出来たオットー Otto のみに単独継承させることにする。

936年ハィンリヒ1世が死去すると，この約定に従い，マティルデの長男オットー1世 Otto I.（*912–在位936–皇帝962–†973）が王座に登る。悪玉公は厩役[18]として即位式に列席する。悪玉公はその娘ユーディト Judith（†985?）をオットー1世の弟ハィンリヒ Heinrich に嫁がせる。937年7月14日，勇猛果断で王者としての風格充分のアルヌルフ悪玉公が亡くなる。彼は父ルーィトポルドから受け継いだよりも遙かに多くの遺産をバィエルンに遺す。悪玉公の長男エーバハルド Eberhard（在位937–938）がバィエルン太公に任じられる。しかしエーバハルドは，バィエルンの主体性を父の治世時より強化しようとしたため[19]，直ぐオットー1世と衝突する。エーバハルドの他の

17） 諸研究者により Hausordnung とされているもの。Monumenta Germaniae Historica（以下 MGH と省略），Die Urkunden der deutschen Könige und Kaiser, Bd. I, zweite unveränderte Aufl., Berlin, 1956, 20. v. 929 Sept. 16., S. 55ff. には，オットーの王国・王位の単独継承及び王妃マティルデへの遺贈地（Quedlinburg, Pöhlde, Nordhausen, Grone）が淡々と記録されているのみ。その精神とか意図についての記述は一切無い。

18） LMA, Bd. V, Sp. 67 及び Bd. VII, Sp.1751ff. によれば，王宮の四つの重要な宮内職（厩役 Marschall・納戸役 Kämmerer・献酌役 Mundschenk・内膳役 Truchseß）には，メーロヴィング朝（当時は更に宮宰 Hausmeier がこれに含まれて五職）以来，王国最高位の太公が就任する慣わしになっていた。

19） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S. 290 及び Wilhelm Störmer, in: LMA, Bd. III, Sp.1512 によれば，両者の武力衝突の原因は「オットー1世がバィエルン太公の諸特権を削減したため」。

兄弟もオットーへの服属を拒否する。そこでオットーは938年始め，バィエルンに出兵し征圧を試みるものの，この軍事行動は失敗する。このバィエルンの動向を見て，タングマル Thangmar 或は Thankmar（*900/905-†938）がオットー1世に叛旗を翻し，公然と決起する。タングマルはハィンリヒ1世が最初の妻ハーテブルグ Hatheburg との間にもうけた長子。彼はオットー1世よりも7歳は年上であったが，929年の約定により王国の継承から外されていた。オットー1世は，タングマルの実母ハーテブルグが死去したとき，彼女がオットーとの結婚時に持参したザーレ Saale 中流域メルゼブルク Merseburg の所領を，オットーの実弟ハィンリヒ（後のバィエルン太公ハィンリヒ1世）に渡してしまう。更に937年，タングマルの母方の従兄弟で辺境使 legatio ジークフリード伯 Graf Siegfried が亡くなったとき，オットーはタングマルを無視してジークフリードの弟とされるゲロ1世 Gero I. にその役職を委ねる[20]。王国統治への関与の望みをまったく絶たれたタングマルは，コンラート1世の兄弟でフランケン太公エーバハルド Eberhard（†939）と結託の上，決起する[21]。彼らは先ず国王の実弟ハィンリヒを攻撃し，メーネ Möhne 河畔のベレッケ Belecke 城，更にディーメル Diemel 河畔のエーレスブルク[22] Eresburg を占拠，彼を人質にする。しかしオットー1世軍が逆襲して来たとき，ハィンリヒの家臣がエーレスブルクのペータ教会 Peterskirche でタングマルを槍で刺し殺す――タングマルは自らの武器と王権の象徴たる金鎖首掛けを祭壇に置き，王息が持つ国王としての支配権の放棄を明

20） Josef Fleckenstein, Begründung und Aufstieg des deutschen Reiches, in: H. Grundmann (hg.), Gebhardt, Handbuch der Deutschen Geschichte, 9., neu bearbeit. Aufl., Bd. 1, erster unveränderter Nachdruck, Union Verlag Stuttgart, 1973. S.237 及び LMA, Bd. VIII, Sp.610.

21） J. Fleckenstein, Begründung und Aufstieg S. 237 によれば，フランケン太公エーバハルトは自らの判断で反抗的なザクセンの封臣を処罰した。それが「独断専行」とされてオットー1世の怒りを買い，彼及びフランケンの重臣が重い処分を受ける。これをきっかけにエーバハルトは反オットー色を鮮明にする。

22） 本稿註7に説明されている Irminsul が在った城。

示していたにも拘らず。

タングマルの謀反は彼の死で終り，フランケン太公エーバハルトは人質ハインリヒを解放し，オットー1世と和解する。オットー1世は，この乱鎮圧後の938年秋，再度バイエルン征討に向かう。強力な軍を引き連れた彼はバイエルン太公エーバハルトを蹴散らし，エーバハルトの叔父，つまり悪玉公の弟ベルトルド Berthold（在位938–947）をその後任に据える。

この事件の翌939年，今度はオットー1世の実弟ハインリヒが，王位継承権或いはオットー1世との共治権を求めて[23]，フランケン太公エーバハルド及び王妹ゲルベルガ Gerberga の夫ロートリンゲン太公ギゼルベルト Gisel-bert（†939）の支援の元，オットー1世に謀反を起こす。彼らは司教たちをも味方に付けつつ，武力でオットーを絶体絶命のところまで追い詰めたが，ライン河のアンダナハ Andernach 対岸で国王軍の奇襲攻撃に遭い，ハインリヒは命拾いしてオットーに赦されるものの，エーバハルトとギゼルベルトは落命し，939年10月，謀反は終る。オットーはザクセンにあるハインリヒの諸城をも接収し，フランケン太公国同様，ザクセンを王権の管理下に置く[24]。オットー1世は，940年，実弟ハインリヒを赦してロートリンゲンを委ね，シュヴァーベンとバイエルンは，以前同様，コンラート家のヘルマン1世 Hermann I.（在位926–948）と上述のベルトルド両太公にその支配を継続させる。オットー1世はアルヌルフ悪玉公の存命中（937年7月14日以前）にその息女ユーディトと実弟ハインリヒを結婚させているが，940年，彼は，その長子リウドルフ Liudorf をシュヴァーベン太公ヘルマン1世の娘イダ Ida と婚約させ，という具合に，この両太公家と姻戚関係を取り結ぶことにぬかりは無かった。オットー1世は西フランク王国でも政略結婚の網を張る。彼は939年，実妹ゲルベルガを，その夫ギゼルベルトの死後，カーロリング

23） LMA, Bd. IV, Sp. 2063. J. Fleckenstein, Begründung und Aufstieg S.237 によれば，王家に生を享けた以上政権を奪取して当然，という理由からの叛乱，とされている，とのこと。

24） フランケン地域は二度と自立的太公領に形成されることはなかった。

家のルイ4世 Louis IV.（在位 936–954）に嫁がせたが，既に937年に[25]その下の実妹ハドヴィヒ Hadwig をルイ4世に敵対するロベール家 Robertiner のフランキア太公 dux Francorum ユゴー Hugo（*893–†956）に嫁がせていて，フランスでの自らの影響力と発言権の確保をも計る。

ところが，ロートリンゲン太公に任じたハィンリヒは，またまた謀反を企み，941年，彼はオットー1世の命を狙い王座を簒奪しようとする。事前に発覚したため大事には至らず，ハィンリヒはインゲルハィムで捕縛される。豪族たちはハィンリヒの断罪を求めるが，ハィンリヒが贖罪の衣をまといオットーの足元に身を投げ出したとき，オットーは彼を再び赦す。この和解には王母マティルデの力もあったようで，以後ハィンリヒは国王に誠実を尽す[26]。後任のロートリンゲン太公にはコンラート赤毛公 Konrad der Rote（*?–太公 944–953–†955）が任命され，彼は947年頃オットー1世の息女リゥトガルド Liutgard を娶る。

オットー1世は東フランク王国の王位と領土を遺産として単独継承したものの，多くの謀反との対決を余儀なくされた。オットー1世の治世の前半は，929年の約定に起因する「負の遺産」処理に費やされた，と言えよう。

オットー1世によりルーィトポルド家第3代目のバィエルン太公に任じられたアルヌルフ悪玉公の弟ベルトルドは，943年，上オーストリア Oberösterreich ヴェルス Wels 近郊でのハンガリー人との戦いで輝かしい戦果を挙げはするものの，バィエルン太公国に嘗ての勢威は既に見られなかった——太公位の相続も許されず，領土も切り取られ，司教任命権も奪われていた。だが，ベルトルドは死ぬまでオットー1世に忠誠を尽す。しかしながら947年にベルトルドが死去すると，太公権力が部族と癒着するのを阻止するため太公に

25）LMA, Bd. V, Sp.160.

26）「ザクセン史三巻 Rerun Gestarum Saxonicarum libri III」を書いた年代記者 Widukind（*?–†973）によればオットー1世の持つ最高の美徳は「心の優しさ clementia」，と J. Fleckenstein, Begründung und Aufstieg S.239 に記されている。

は可能な限り部族と無関係な者を任命する，というオットー1世の太公政策に基づき，後継太公に国王への謀反を繰り返したハィンリヒ Heinrich（*919/22?－在位 948–†955；バィエルン太公としてハィンリヒ1世）が任命され，ベルトルドの幼い子息ハィンリヒ Heinrich（*940 以後–†989）はバィエルン太公国の相続から排除されてしまう。これによりバィエルンは究極的に東フランク王国に吸収される。王弟ハィンリヒはアルヌルフ悪玉公の長女ユーディトを妻に迎えていたが，バィエルン人は初めて言葉を異にするザクセン人太公を戴くことになる。

一方，950年にはイタリア情勢が緊迫して来ていた。歴史を若干遡ると，ルートヴィヒ1世敬虔帝の長男ロータル1世の流れを汲む一派と，同じく敬虔帝の王女ギーゼラ[27] Gisela の流れを汲む一派とが，イタリア支配を巡って争っていた。当時の男系の見地からすれば，ロータル1世側がカーロリング家正統を主張したのも尤もであろう。王女ギーゼラを母に持つベーレンガル1世 Berengar I.（在位 888–皇帝 915–†924）は，皇帝カール3世肥満王の跡を受けて，888年イタリア国王になり915年皇帝になる。924年彼が死去すると，926年，その敵対勢力の指導者でロータル1世の孫娘ベルタ Bertha を母に持つプロヴァンス太公ウーゴ Ugo（在位 926–†947?，ドイツ名 Hugo）がイタリアの豪族に招かれイタリア王位に即く。ウーゴは，アルプスを包含する大帝国創設を目指し帝位を得んとしてそれはならなかったものの，東フランク王国国王ハィンリヒ1世及びビザンツ帝国皇帝ロマノス1世 Romanos I.（*870?–†948）と同盟を結び，国内でも安定した政治を行う。931年，彼はその子息ロターリォ Lothario（*926/928–†950，ドイツ名 Lothar）を共治王に即け王統を確保する。937年，高地ブルグンド Hochburgund 国王ルードルフ2世 Rudolf II.（*880–在位 912–†937）が死去すると，ウーゴは，その未亡人ベルタ Berta（シュヴァーベン太公ブルヒァルド1世 Burchard I.［†926］の娘）を妻に娶り，ロターリォをベルタの娘，つまり王女アーデルハィド Adelheid

27） ギーゼラはフリアゥル辺境伯エーバハルド Eberhard と結婚した。

(*931?–999) と婚約させ (947年結婚), プロヴァンスとブルグンド Burgund を併合した大ブルグンド王国の建国を図る。ところが945年, ベーレンガル1世の孫で亡命先のシュヴァーベンから帰国したイヴレーア Ivrea 辺境伯のベーレンガル2世 Berengar II. (在位 950–961–†966) が, オットー1世の支援を得て, 北イタリアで勢力を伸ばしウーゴを脅かす。947年, ウーゴはベーレンガル2世に決戦を挑むが急死する。その子息ロターリォも950年11月22日に死ぬ。彼の死によりイタリア王位のカーロリング家男系の血筋が絶える。するとベーレンガル2世は12月15日, パヴィァ Pavia で子息アーダルベルト Adalbert と共にイタリア国王に即位し, その王位を固めるため, アーダルベルトをロターリォの未亡人アーデルハィドと結婚させんとし, それを肯んじないアーデルハィドを幽閉する。このようなイタリアの動静を知ったオットー1世は彼らの即位を王位簒奪と判断, 軍を率いてイタリアに向かう。951年9月23日, オットー1世は嘗てのランゴバルド王国 Langobardenreich の首都パヴィァに姿を現す。が, その前日にはベーレンガル2世親子はパヴィァを去っていた。その年の暮れ, オットー1世は, 選挙も戴冠も無しにイタリア王位に即き, アーデルハィドと結婚する。この時オットー1世は皇帝戴冠を考えたが, ローマの情勢がそれを許さなかった[28)]。952年, オットー1世はアゥクスブルク Augsburg の王国会議で嘗ての敵ベーレンガル2世及びアーダルベルトを赦し, 両人に, 誠実誓約をさせた上で, イタリアを授封する。

国王である実兄に赦されて948年バィエルン太公に任じられたハィンリヒ1世は, 兄オットー1世に誠実を尽す。彼はハンガリー人と正面から向き合い, 彼らに大きな勝利を収めたこともあった。彼は951年9月のベーレンガル2世征討の国王軍にも従軍する。その見返りにバィエルンに, 前述のアゥクスブルク王国会議で, 辺境伯領トリエント Trient, ヴェローナ Verona, アキレィア Aquileja とイストリア Istrien を含む嘗てのランゴバルド王国の

28) LMA, Bd. VI, Sp.1565.

太公国フリアウル[29] Friaul が併合されることが決まる。山国バイエルンは念願の海岸を手に入れ，東フランク王国は南方への通路をようやく確保する。

953年，王息でシュヴァーベン太公リウドルフ（*930–太公950–954–†957）と，王女リウトガルド[30]の夫でロートリンゲン太公コンラート赤毛公が，アルヌルフ悪玉公の三男でバイエルンの宮廷伯アルヌルフ Pfalzgraf Arnulf in Bayern（*?–†954）を巻き込んで，オットー1世に対する謀反を起こす。彼らの謀反はオットー1世をその対象にしていたが，主敵はバイエルン太公ハインリヒ1世——ハインリヒのために彼らは様々な場面で国王から袖にされた，というのがその主因である。この謀反に反ハインリヒ・反ザクセンの空気漲るバイエルン人もその殆どが加わる。この大叛乱の最中，ハンガリー軍がアウクスブルク近郊に現れる。リウドルフかコンラートかがハンガリー人と手を結んだのではないか，と言われるが，真相は不明。この事件が転機となって叛乱軍側は一挙に不利な立場に追い込まれ，955年5月，オットー1世はやっとこの大叛乱の鎮圧に成功する。

上に見たように，オットー1世は，有力諸侯或いは自分の兄弟・子供たちから叛乱攻めに遭う。東フランク王国にとって非常に危機的な状況の中で国王オットー1世がその支配の拠り所にしたのは王国教会であった。国王即位の際の塗油の儀式から生まれる神政的観念が，オットー1世にそのような王国教会への関与を正当化していた。彼は次々と所領や特権を教会に賦与し，代償として司教や僧院長に対して王国への奉仕 Reichsdienst を求めた。王弟でケルン Köln 大司教ブルン Brun（*923–在位953–†965）はその典型的な例で，

29） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.292.

30） LMA, Bd. IV, Sp.2161 によれば，様々な状況でオットー1世を支えたシュヴァーベン太公ヘルマン1世が949年に死去し，後任に947年に彼の娘イータ Ita（或は Ida）を娶っていた王息リウドルフが任命される。リウドルフ及びリウトガルドはオットー1世の最初の妻エドギス Edgith との間に出来た王子と王女，つまりタングマルの弟妹。エドギスはイギリス国王エドアード Eduard（在位901–925）の王女。

彼は，リゥドルフの大叛乱が頂点に達していたとき，司教職に加えてロートリンゲン太公職を引き受け[31]，国王である兄を支える。オットー1世を巡る窮境から生まれたのが所謂「王国教会制度 Reichskirchensystem」で，929年の約定の落し子と言える。

955年，大叛乱が収拾されて一ヶ月後の6月，ハンガリー軍が嘗て無い程の規模でシュヴァーベン方面に向かってバィエルンに侵入して来る。バィエルン太公ハィンリヒは即座に抵抗を諦め，オットー1世に急使を送る。オットー1世は，大叛乱の収拾直後から，スラヴ人 Slawen との対応に追われていた。しかし彼の決断は速かった。長期に亙った内戦も収めていることでもあり，西方世界における東フランク王国の覇権確保のため，彼は，全国に非常召集令を発してハンガリー軍と戦う決意を直ちに固め，選りすぐりの近衛兵と共にザクセンを発つ。内戦のしこりは解消していた。彼はウルム Ulm 周辺で，馳せ参じたボヘミア人，フランケン人，シュヴァーベン人，バィエルン人と合流，8月10日，レヒフェルト（Lechfeld＝レヒ河原）でハンガリー人と戦いを交える。これが有名な「レヒフェルトの戦い Schlacht auf dem Lechfeld」。ハンガリー人は二度と立ち上がれぬ程の壊滅的打撃を受け，戦いは東フランク王国側の圧勝に終る。以後，ハンガリー人の侵寇は西方世界から絶える[32]。この直後の11月1日，バィエルン太公ハィンリヒ1世は死去，その後任にその子息で当時4歳のハィンリヒ2世喧騒公[33] Heinrich II.

31） 東フランク王国の歴史上，大司教が太公を兼任した例は，後にも前にも皆無。

32） オットー3世治下で東フランク王国の政情が不安定になった985年，ハンガリー人がフリアゥルまで侵出して来たが，991年になってハィンリヒ2世喧騒公はやっと彼らに勝利を収める（K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.296 及び Anm.129）。

33） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.297 及び Anm.133 によれば，「喧騒公」という綽名は後世が彼に与えたもので，アヴェンティーヌス Aventinus（本名 Johannes Turmair [*1477–†1534]）が「バィエルン歴代太公年代記 Annales ducum Boiariae」の中で用いた表現 rixosus「喧嘩早い」がきっかけになった可能性が大きい。

der Zänker（*951–太公 955–976, 太公 985–†995）が任ぜられる。オットー1世は，同年，更にレクニツ河 Recknitz 周辺のスラヴ人も征圧する[34]。これらの勝利は東フランク王国人の帰属意識を強めると共に，オットーの名声を世に轟かせる。

ハンガリー人問題に決着を付けたオットー1世を待っていたのは，またまたイタリアを巡る問題であった。959年，ベーレンガル2世の子息ウィド Wido 或はグィド Guido（生没年等は不詳）がスポレト Spoleto 太公国を征圧，ローマ教皇を脅かす[35]。教皇ヨハネス12世 Johannes XII.（在位 955–963）はイタリア国王でもあるオットー1世のイタリア復帰を望む。961年，オットー1世は，子息オットー（後のオットー2世）を東フランク王国の共治王に即位させて王位継承を固めた上で，教皇とイタリアの豪族の要請に応えてイタリアに入り，漸くベーレンガル2世らの策動に終止符を打つ。皇帝ベーレンガル1世が没して以来凡そ40年振りに962年2月2日ローマで，西方世界を震撼させたハンガリー人を打ち破った強力な皇帝，カトリック世界の星，オットー1世（＝大帝）が誕生する。彼は，ローマ教皇座の所領や諸権利を保障し，北部及び中部イタリアの皇帝支配を固めた上で，965年になってやっと帰国する。

かねてからオットー1世はスラヴ人居住域に対しても東フランク王国の政治力を及ぼすと同時に，キリスト教の布教に努力していた。彼は，948年，オルデンブルク Oldenburg 司教座，ブランデンブルク Brandenburg 司教座，ハーフェルベルク Havelberg 司教座等を，968年，メルゼブルク司教座，マィセン Meißen 司教座，ツァィツ Zeitz 司教座（後にナゥムブルク Naumburg へ移設）を，972/73年，プラハ Prag 司教座を設立する。彼はこれらスラヴの諸司教座を統括する大司教座を設置しようとしたが，これにはマィンツ Mainz 大司教，ハルバシュタト Halberstatt 司教が強く反対したため当初は実現しなかった。しかし皇帝戴冠を終えた968年，オットーは皇帝の権威を

34） LMA, Bd. VI, Sp.1565.

35） Ebd., Bd. I, Sp.1933.

利用し，ビザンツ帝国との問題でローマ教皇ヨハネス13世 Johannes XIII.（在位 965–972）を手助けしたこともあって，教皇の同意を得て，マクデブルク Magdeburg の聖マゥリティゥス Sankt Mauritius 僧院を，ブランデンブルク司教座・ハーフェルベルク司教座・メルゼブルク司教座・マィセン司教座・ツァィツ司教座を属司教座とするマクデブルク大司教座へと昇格させて教会組織の整備に成功する。オットー1世は，その後も皇帝問題を巡るビザンツ帝国との関係改善に努力し，972年，彼は次の国王オットー（後の2世）を，ビザンツ帝国皇帝ヨハネス1世ツィミスケス Johannes I. Tzimiskes（*925?–†976）の同意の元，ツィミスケスの姪テオーファヌ Theophanu 或は Theophano と結婚させる。これにより，ビザンツ帝国もオットー朝皇帝を承認する[36]に至った，と考えてよかろう。このような，オットー大帝の聖俗・国内外に亙る並み並みならぬ努力によって，東フランク王国の統合・発展の基盤が形成される。オットー1世は973年5月，死去する。

オットー1世の死去を受けてオットー2世 Otto II.（*955–在位 961/73–皇帝 967–†983）が円滑に後を継ぐ。しかし翌974年，ハィンリヒ2世喧騒公が従兄弟の国王オットー2世に対して謀反を企てる。ハィンリヒ喧騒公の父は，既述のように，オットー1世の弟ハィンリヒ1世バィエルン太公，母はアルヌルフ悪玉公の息女ユーディト。ユーディトは，シュヴァーベン太公リゥドルフ（在位 950–954）と彼女の実弟のバィエルンの宮廷伯アルヌルフ等が企んだ953年の大叛乱の際，ルーィトポルド家の中で只一人叛乱側に組みさなかった。そのため彼女は一時バィエルンからの所払いを余儀なくされていたが[37]，955年，父を亡くして直ぐ4歳にして太公位に即いたハィンリヒ2世喧騒公には後見役が必要とされ，その役を務めたのが母ユーディトとフラィ

36）476年の西ローマ帝国滅亡後は，ビザンツがローマ帝国を継承した，と一般に理解される。カール大帝は，自らローマ帝国皇帝になり更にルートヴィヒ1世敬虔帝を共治帝にすることによって，この問題（＝両皇帝問題）を先鋭化させたが，これにけりを付けることなく死去した。これの解決は15世紀に持ち越される。

37）K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.295.

ジング司教アブラハム Abraham（在職 957–993?）。ハインリヒ喧騒公がいつから自立的に太公職に就いたかは不明であるが，当時の成人年齢が 16 歳とされていることから，彼の場合は 967 年頃から，と推定される。973 年，ハンガリーの大侯ゲーザ Großfürst Geza の使節団がクヴェードリンブルク Quedlinburg にやって来たが，その目的は平和交渉を巡ってのようで，成人に達したハインリヒ喧騒公がハンガリー領内を盛んに荒らし所領の拡大を図っていたことに起因してのようである[38]。

974 年，このようなハインリヒ喧騒公がオットー 2 世に謀反を企む。その理由は明らかでなく様々に憶測されているが，理由の一つは，彼の実妹ヘドヴィヒ Hedwig の夫シュヴァーベン太公ブルヒァルド 3 世 Burchard III.（在位 954–†973）が死去したとき，その後任にオットー Otto（在位 973–†982，国王オットー 2 世の異母兄リウドルフの子，つまりハインリヒ喧騒公の従兄弟，の子）がシュヴァーベン太公に任じられ，ハインリヒ喧騒公が，無視された，と感じたらしいこと，もう一つは，バーベンベルク家の二人の兄弟，即ち，ノルトガウ辺境伯ベルトルド Berthold（†980）とオストマーク Ostmark に勢力を張る新バーベンベルク家 jüngere Babenberger の始祖ルーィトポルド 1 世 Luitpold I.（＝レオポルド Leopold I. †994），の両兄弟が夫々の領地で勢力を伸ばしつつあり，両兄弟を国王オットー 2 世が，バイエルン太公の権力を弱体化させるため，意識的に支援していたことにハインリヒ喧騒公が脅威を感じたらしいこと，とされる[39]。兎も角，喧騒公はルーィトポルド家の肉親及び関係者――彼の従兄弟ライゼンスブルクのベルトルド Berthold von Reisensburg（†976 年以後），彼の叔母（名前不詳）の配偶者でオストマーク辺境伯兼レーゲンスブルク城伯ブルヒァルド Burggraf Burchard（在職 955–976），彼の後見役の一人フライジングのアブラハム等――から支援を受けつつ，この陰謀にボヘミア太公ボレスラフ 2 世 Boleslav II.（在位 967 或は 973?–†999）及びポーランド太公ミエシュコ 1 世 Mieszko I.（在位 960?–†992）をも引き入

38） Ebd., S.296.

39） Ebd., S.297.

れた。しかしこの陰謀は発覚，その年の内にその共謀者たちは捕えられインゲルハィム Ingelheim に送られる。975年にオットー2世がボヘミア太公ボレスラフ2世に軍を向けたのもこの陰謀に関連してであろう。976年始め，インゲルハィムから脱出したハィンリヒ喧騒公はバィエルンで支持者を集めて再度謀反を起こすが，これはオットー2世に鎮圧される。その後もハィンリヒ喧騒公の策動は続くが，この事件をきっかけにオットー2世はバィエルン関係の太公領の再編成を行う。ルーィトポルド家と姻戚関係にあったブルヒァルドに替えて，ルーィトポルド1世（在職976–†994）をオストマーク辺境伯に任命し，更に，ケルンテン及びヴェローナ，アキレィアとイストリアをバィエルンから切り離してケルンテン太公領[40]とし，その太公にルーィトポルド家の元バィエルン太公ベルトルドの遺児ハィンリヒ3世 Heinrich III.（†989，ヘツィロ Hezilo[41] とも呼ばれる）を任命，残余のバィエルン太公領をシュヴァーベン太公オットーに委ねる。オットー2世はこうして東部辺境地域及びイタリアへの出兵にとって重要な地域を信頼の置けるハィンリヒ3世（ヘツィロ）に委ね，新興勢力バーベンベルク家にも辺境伯の地位を与えることにより，同家にも配慮した人的配置を行う。

しかし977年，ハィンリヒ喧騒公は，ボヘミアの援助を得て，ケルンテン太公ハィンリヒ3世（ヘツィロ）とアゥクスブルク司教ハィンリヒ[42] Heinrich（*?–†982）と共に，バィエルンを奪取しようとする。彼らはボヘミアとの交通にとって重要なパッサゥを占拠する。オットー2世はバィエルン太公オットーと共に，先ずボヘミア太公ボレスラフ2世を圧伏し，それからパッ

40) Peter Rassow (hg.), Deutsche Geschichte im Überblick, ein Handbuch, Stuttgart, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1973. S.118.

41) Ludwig Schrott, Die Herrscher Bayerns – Vom ersten Herzog bis zum letzten König, Süddeutscher Verlag München, 1966. S.38.

42) このハィンリヒは，アルヌルフ悪玉公の名前不詳の娘とオストマーク辺境伯ブルヒァルドとの間の子息，つまりアルヌルフ悪玉公の孫にあたり，973年からアゥクスブルク司教になっていた。後述のように南伊アプーリェン Apulien 地方のコロンネ岬 Capo Colonne で戦死する。

サゥを包囲，ハィンリヒ喧騒公を降す。喧騒公はユトレヒト司教フォルクマー Folkmar von Utrecht（在職 976–991）の許に追放され，ハィンリヒ3世（ヘツィロ）も追放される（追放先不明）。ケルンテン太公には，ロートリンゲン太公コンラート赤毛公の子息，つまりオットー2世の甥のヴォルムスのオットー[43] Otto von Worms（*?–†1004）が任命される。以上のような結末で，二人のオットー対三人のハィンリヒの騒乱，つまり，国王オットー2世とシュヴァーベン太公兼バィエルン太公オットー，対，ハィンリヒ2世喧騒公とハィンリヒ3世（ヘツィロ）とアゥクスブルク司教ハィンリヒ，の叛乱は決着する[44]。

皇帝オットー2世のイタリア政策は，当初から南イタリアをその支配下に置くことを狙うもので，それは，アルプスを挟む広大な領域を支配下に収めビザンツ帝国を上回る帝国を形成する，という帝国政策の一環を成す。当然，南イタリアを支配しているビザンツ帝国及びイスラム勢力の排除が前提になる。981年，皇帝オットー2世は南イタリア支配のため出兵，バィエルン太公オットーもそれに参加するが，皇帝軍は982年7月，南イタリアのアプーリェン地方のコロンネ岬におけるイスラム勢力との戦闘で決定的な敗北を蒙り，オットー2世は，ビザンツ帝国の船で逃れ，辛うじて命拾いをする有様[45]。以後イタリアにおける東フランク王国の影響力は大きく低下，バィエルン太公オットーも帰国の途上ルッカ Lucca で11月に死ぬ。イタリアでの大敗北に直面して皇帝オットー2世は強力な諸侯との妥協に追い込まれ，983年5月のヴェローナでの王国会議では，南イタリアで死亡したバィエルン太公オットーの後任に，追放されていたハィンリヒ3世（ヘツィロ）を任

43） Otto von Worms は，985年までケルンテン太公職に留まったとされているため，Otto von Kärnten とも呼ばれる。985年，新設のヴォルムス太公領の太公に任命され，995年にはヴェローナ辺境伯，1002年には再びケルンテン太公の地位に就く。彼はバィエルン太公オットーの従兄弟にあたる。

44） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.300.

45） LMA, Bd. II, Sp.1484.

ずる――彼は以後オットー2世に忠誠を尽す。同王国会議では，更に，オットー2世の長男オットー（後のオットー3世）が後継国王に決定される。983年夏，皇帝不在を衝いて，エルベ河 Elbe 及びザーレ河 Saale 東域のスラヴ人が大叛乱を起こす[46]。彼らは，オットー1世が設立したブランデンブルク司教座，ハーフェルベルク司教座を破壊，エルベ河及びザーレ河東域を取り戻す。イタリアでの大敗北に加えて，王国東域でのスラヴ人大叛乱は皇帝オットー2世の晩年に暗い影を落とす。983年12月オットー2世は，ローマでアラブ人との戦闘準備中にマラリアに罹って死亡，享年28歳。彼の遺骸は――東フランク王国皇帝としては彼のみ――ローマのサン・ピエトロ寺院 San Pietro に葬られる。

王位を継いだのは，王国会議の決定通り，当年3歳半のオットー3世 Otto III.（*980年6月或は7月-在位983-†1002）。彼は，オットー2世の死を知る直前の983年クリスマスに，アーヘン Aachen で国王に戴冠されていた。追放先のユトレヒトから脱出したハィンリヒ2世喧騒公が，オットー3世の摂政職を巡って，騒動を起こす，将に世間を騒がす男。オットー大帝を伯父に持つ彼[47]は，男系でオットー3世に次ぐ王位継承順位にあった。加えて，王母テオーファヌは当時未だイタリアに居た。これは摂政職を握る上でもテオーファヌより有利，当時30歳を超えていた喧騒公はこの幼い国王を奪い去る。摂政職を手中に収めて東フランク王国の支配権を握ろう，という喧騒

46) LMA, Bd. VI, Sp.23f. によれば，この大叛乱を主導したのは西ポムメルン Vorpommern 及びメクレンブルク Mecklenburg 地域，即ちペーネ Peene 両岸域に居住していたスラヴ人の部族連合体ルティーツェン Lutizen（或は Liutizen）。この集団は Zirzipanen, Kessiner, Tolensanen（或は Tollenser）及び Redarier 等のスラヴ諸部族から成る。オットー大帝はこの地域のスラヴ人の自立的支配を排除，堡塁の網を巡らせてこの地域をローマ教会組織に組み込んでいた。このような東フランク王国の侵出に対する反感が Redarier を主体とする激しい叛乱を生んだ。

47) ハィンリヒ2世喧騒公の父はバィエルン太公ハィンリヒ1世，バィエルン太公ハィンリヒ1世はオットー大帝の弟。

公の野望に対し，マインツ大司教ヴィリギス Willigis を中心とした諸侯が抵抗する。結局 984 年 6 月，ハィンリヒ喧騒公はオットー 3 世の身柄を返還し，王位簒奪を断念する。以後王母テオーファヌが，大司教ヴィリギスの後援を得て，その死（991 年 6 月）まで国務を司る。ハィンリヒ喧騒公は，今度は，バィエルン太公領をハィンリヒ 3 世（ヘッィロ）から武力で奪い返そうとする。が，旨い具合に事は運ばない。そこで彼は，ヘルマン伯[48] Hermann の仲裁に基づき，バィエルンを断念する代りに，嘗てバィエルン太公領の一部であったケルンテン太公領を返還するよう，要求する。この彼の要求をフランス国王ロタール 3 世[49] Lothar III.（*941–国王 954–†986）もロートリンゲン奪還がらみで支持する。そこで 985 年 1 月，フランクフルト王国会議は事態の拡大防止のため，調整を行い，ヴォルムスのオットーを，ケルンテン太公職から解いて，ヴォルムス太公領を新設してその太公に任じ，ハィンリヒ 3 世（ヘッィロ）を，バィエルン太公職から解いて，ケルンテン太公に任じ，ハィンリヒ 2 世喧騒公をバィエルン太公に任命する。各々が元の古巣に戻った形。986 年の復活祭に，東フランク王国国王オットー 3 世はクヴェードリンブルクで王国会議を開催，続いて華やかな祝宴を催す。祝宴では，バィエルン太公ハィンリヒが内膳役を，ケルンテン太公ハィンリヒが献酌役[50]を，厳か且つ円満に，務める。

989 年 10 月，ケルンテン太公ハィンリヒ 3 世（ヘッィロ）が死去する――ルーィトポルド家の始祖ルーィトポルド伯が 895 年にバィエルンの辺境域の

48） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.301 によれば，ヘルマン伯はアルヌルフ悪玉公の子，と想定される。だとすればヘルマン伯はハィンリヒ 2 世喧騒公の「伯（叔）父」に当たる。

49） ロタール 3 世の父は西フランク王国国王ルイ 4 世 Louis IV. であるので，ロタール 3 世はカーロリング家の末裔。母はオットー 1 世（＝大帝）の妹ゲルベルガ，従ってロタール 3 世とハィンリヒ 2 世喧騒公は従兄弟同士の関係にあり，この両者はオットー 3 世の祖父オットー 1 世を伯父に持つ。ロタール 3 世はロートリンゲン奪還を巡ってオットー 2 世と戦火を交えていた。

50） 本稿註 18 参照。

統括を委ねられてから凡そ100年の間ルーィトポルド家はバィエルンの政治に関わった――その結果，ルーィトポルド家男系は絶える。そこで，ハィンリヒ3世（ヘツィロ）の太公領ケルンテンをハィンリヒ喧騒公が受け継いだ結果，喧騒公は嘗てのバィエルン太公国の全領域を手中にすることになる。以後，彼の喧騒ぶりは姿を消し，死ぬ（995年）までオットー3世に忠誠を尽す。彼はブランデンブルク奪還を目指すオットー3世のスラヴ人征圧にも従軍する。

991年，王母テオーファヌが死去すると，祖母である皇太后アーデルハィドがオットー3世の摂政を務める。994年9月，彼は帯刀の儀を行い，自ら政務を執り始める。早速彼は，ローマ行きの決心を表明，その政策の基本構想を明示する。当時，彼は，カラブリア出身のヨハネス・フィラガトスJohannes Philagathosや王宮礼拝堂司祭ベルンヴァルド[51] Bernward（*960年?–†1022）から，キリスト教の在り方や王国の基本的政策について充分な教育を受けていた。後に彼は，時代を代表する精神生活の指導者プラハのアーダルベルト[52] Adalbert等をその身辺に集め，イタリアの隠者カマルドリのロムァルド[53] Romuald von Camaldoliにも深く共鳴する。

51） LMA, Bd. I, Sp.2012f. によれば，ベルンヴァルドはザクセンの大豪族の出，美術・工芸にも明るいルネッサンス的人物。ユトレヒトの司教フォルクマー（本稿75ページ）は彼の叔（伯）父。987年王宮礼拝堂司祭になり，989年オットー3世の教育係を命じられる。993年ヒルデスハィムHildesheimの司教になる。彼は，オットー朝司教の典型的人物で，精神生活の向上，教会規律の淳化及び教養の深化，教会組織の拡大に意を用いた。

52） LMA, Bd. I, Sp.101f. によれば，アーダルベルト（*956–†997）はザクセンのリゥドルフィング家と姻戚関係があるとされる侯家の出，983年プラハ司教になり，988年その職を辞しローマに行く。彼がオットー3世と交流を持ったのは，サン・ボニファツィォとアレッシォの僧団にいた時。彼はプロイセンの異教徒への宣教活動中，殉死する。ポーランド太公ボレスラフ1世フロブリBoleslaw I. Chrobry（*966?–†1025）はその遺骸をプロイセン人から買い取り，首都グネーゼンGnesenに葬る。1000年オットー3世はアーダルベルトの墓に詣でこの地に大司教座を設置する。

53） LMA, Bd. VII, Sp.1019f. によれば，ロムァルド（*950?–†1027）は，公子とし

996年初め，オットー3世はイタリアに向かう。その途中ヨハネス15世 Johannes XV.（在位985–996）の死去の知らせを知り，従兄弟ヴォルムス太公オットーの子息ブルン Brun を教皇に指名，その名をグレゴリゥス5世 Gregorius V.（在位996–†999）とする。東フランク王国出身の教皇の誕生である。オットー3世は身内であるこのグレゴリゥス5世の手から同年5月皇帝に戴冠される。皇帝オットー3世は政教合同の王国会議を開催し，聖俗の協調・連帯を世に明らかにする。が，実態は，東フランク王国国王が教皇座を牛耳ったことに他ならない。ローマの豪族クレシェンツォ2世 Crescenzo II.（*?–†998）を筆頭とするローマ人は当然これに反発，オットー3世がローマを去ると直ぐ，彼らはグレゴリゥス5世を追放，オットー3世の信任厚いフィラガトスを対立教皇に立て，ヨハネス16世 Johannes XVI.（在位997–998）とする。今やオットー3世が殴り返す番，998年彼は再びローマ入りし，クレシェンツォ2世及びその一派を捕えてその首を斬り，逃走したフィラガトスを捕縛，肉体を切り刻む体罰を科し，僧院に押し込む[54]。

999年，返り咲いたグレゴリゥス5世が死去すると，オットー3世は前年

て10世紀半ばラヴェンナ Ravenna に生まれた。彼は父と共に私闘に巻き込まれ，これをきっかけに僧になる。多くの転変を経て，1021年皇帝ハィンリヒ2世により彼はモンテ・アミアータ Monte Amiata の僧院長に任命され，カマルドリに隠者庵を作る。ロムァルドの生涯は論争に明け暮れた。彼は聖職者の腐敗を厳しく指摘，多くのベネディクト会士の凡庸さをも鋭く批判，常に全ヨーロッパの優れた人士と交流，その死後も，例えば，ペトルス・ダミアーニ Petrus Damiani に影響を及ぼす。ロムァルドは11世紀の教会改革運動の精神的土壌を準備した人物，とされる。

54） LMA, Bd. V, Sp.542f. によれば，ヨハネス16世フィラガトス（*?–†1001?）はカラブリア Kalabrien 出身のギリシア人。オットー3世の信任厚く，ピァチェンツァ Piacenza 大司教及びパヴィァ王宮長を務め，皇帝オットー3世の花嫁選びの特使としてビザンツ帝国に赴く。そこから帰国したとき彼は対立教皇に推された。彼は押し込められた僧院で1001年頃死んだ，とされる。彼の受けた体罰は，verstümmelt と形容されていることから，よほど陰惨で惨忍な刑罰，時に17歳の皇帝オットー3世にすれば，可愛さ余って憎さ百倍，だったのだろう。

にラヴェンナ大司教に任じていた[55] オリヤックのジェルベール[56] Gerbert von Aurillac をその後任に指名，シルヴェスタ2世 Silvester II.（在位 999–1003）を名乗らせる。この名はオットー3世とジェルベールの支配意図を明示する。と言うのも，4世紀，シルヴェスタ1世（在位 314–335）はコンスタンティーヌス1世 Constantinus I.（在位 副帝 306–324，皇帝 324–337）と完全な協調行動をとった，と言われ，その再現を目指しての命名，と理解されるからである。オットー3世は，ジェルベールや後のケルン大司教ヘリベルト Heribert（在位 999–1021）及びヴェルチェッリのレオ Leo von Vercelli（*?–† 1026?）の助力を得て「ローマ帝国の復興 Renovatio imperii Romanorum」の理念を明確にし，ローマこそ聖権と俗権の各代表者が職務を執行すべき場，このローマから皇帝はキリスト教国の人民・支配層を統御すべし，との固い信念を抱くに至り――オットー3世は伝統的な「コンスタンティーヌスの定め[57]」を無視し教皇領の存在そのものを否定する――ローマ皇帝アゥグス

55) Josef Fleckenstein, Horst Fuhrmann, Joachim Leuschner, Deutsche Geschichte: Sonderausgabe, Bd. 1 Mittelalter, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1985. S.162（この項の執筆者は J. Fleckenstein).

56) LMA, Bd. IV, Sp.1300ff. によれば，ジェルベール（*950年?–†1003）はアキタニアのオリヤックの質素な家庭に生まれ，970年頃ローマに出て教皇ヨハネス13世の仲介でオットー1世の知己を得る。オットー2世の執り成しで982年から1年間北イタリアの僧院ボッビォ Bobbio（現イタリア領でトレッビア河谷の町）の僧院長になる。996年5月彼はオットー3世にローマで会い，997年オットー3世に依頼され彼の個人的師及び政治上の助言者になる。

57) Constitutum Constantini 或は Konstantinische Schenkung「コンスタンティーヌスの寄贈」。LMA, Bd. V, Sp.1385f. 及び Brockhaus-Enzyklopadie, 19., vollig neu bearb. Aufl., Mannheim, 1990（以下 Brockhaus と省略), Bd. 12, S. 292 等によれば，1433年，この文書はローマによる偽作，と断定された。この文書は Confessio 部分と Donatio 部分から成り，前者は，ローマ教皇シルヴェスタ1世（在位 314–335）が癩病と戦う皇帝コンスタンティーヌス1世（＝大帝，在位 324–337）に洗礼を授けたことから大帝の病が快癒したというシルヴェスタ伝説，並びに大帝の信仰告白を含み，後者は，教皇への感謝の念から大帝が教皇に与えた諸権利及び寄贈内容を含む。ローマ教皇庁はこの文書を拠り所にして教皇領の所有・支配を正当化して来た。この偽作文書の成立時期は「ピピーンの寄

トゥス Augustus（在位 紀元前27–紀元後14）がその宮殿を置いたパラティーノ Palatino の丘に王宮を造営させる。彼の真意は，聖権を俗権の下に置き，ローマはもとより，全キリスト教世界に君臨することにあった。彼は，その意図の実現を図る際，現実の力関係を熟慮することはなく，言わば，机上の空論を，即，実行に移した。その結果，ローマにとっては異国人以外の何物でもない人間オットー3世は，1001年，ローマの豪族及び市民によってローマから追い出される。教皇と共にラヴェンナに逃げた彼は，ローマ奪還準備中，マラリアを病んで死去する（1002年1月24/23日）。享年21歳，独身であった。彼の業績として挙げられるのは，信仰上及び政治的に尊崇していたアーダルベルトの墓をグネーゼンに詣で同地にポーランド大司教座を設置（1000年），グラーン Gran（現エステルゴム Esztergom）にハンガリー大司教座を設置（1001年），ハンガリー太公イシュトヴァーン István をシュテファン1世[58] Stephan I.（*970?–国王1001–†1038）としてハンガリー国王に即位させ，ビザンツ帝国の影響力を排除しつつ東方地域のカトリック教会組織及び国家体制を固めたこと，であったろうか。「レヒフェルトの戦い」（本稿70ページ参照）から半世紀を経ずして，ハンガリーは西方世界の一員になるが，留意すべきは，オットー3世の真意は，ポーランド及びハンガリーを東フランク王国にではなく，彼の想念に厳存する「ローマ帝国 imperium Romanorum」に組み込むことにあった点，である。

贈 Pippinische Schenkung」（ランゴバルド人が奪った教皇領を小ピピーン Pippin der Jüngere［*714/715–宮宰741–国王751–768］が奪回し教皇に返還すると約した小ピピーン文書）の成立当時（754/56年）からフランク国王カールの皇帝戴冠（800年）を経て850年頃迄，と想定されている。J. Fleckenstein, Deutsche Geschichte: Sonderausgabe, Bd. 1, S.161 によれば，オットー3世は1001年にこの「定め」を偽作，と非難している。

58） J. Fleckenstein, Deutsche Geschichte: Sonderausgabe, Bd. 1, S.163 によれば，シュテファン1世は996年プラハ司教アーダルベルトから洗礼を受け，オットー3世が代父になった，とのこと。彼は997年にバイエルン太公ハインリヒ2世喧騒公の息女ギーゼラ Gisela と結婚していた。ギーゼラとバイエルン太公ハインリヒ4世（＝皇帝ハインリヒ2世）は兄妹の間柄。

オットー3世の後を継いだのは，ハィンリヒ2世喧騒公の死去（995年）当時，既に国王の許可を得て共治太公としてバィエルン太公の地位にあったその子息ハィンリヒ4世 Heinrich IV.（在位 995–1004，1009–1018）で，国王としてはハィンリヒ2世 Heinrich II.（*973/78?–在位 1002–皇帝 1014–†1024）を名乗る。バィエルン太公ハィンリヒ4世は，父ハィンリヒ2世喧騒公が974年以来余りに世間を騒がせ続けたため，当初，太公位の相続からも排除されたかに見えた。父太公がユトレヒト司教フォルクマーの許に追放されたとき，幼児ハィンリヒもその側杖を食ってバィエルンを追われてザクセンの司教座教会ヒルデスハィム Hildesheim に送られ，聖職に就くよう定められる。これは国王オットー2世の差し金と推定される。オットー2世は王座を競い合う者を排除することを狙ってこの措置を採ったが，この彼の差し金は，幼児ハィンリヒへの父公の影響を遮断する上では，好ましい結果を生む。985年以後，国王と和解した喧騒公は，ハィンリヒ等子供たちの教育をレーゲンスブルク司教ヴォルフガング Wolfgang（在職 972–994）に委ねる。この地の僧院聖エメラム St. Emmeram でハィンリヒは，司教ヴォルフガングを介して，ロートリンゲンのゴルツェ Gorze 僧院に端を発する僧院改革運動を知る。父太公によりバィエルンに呼び戻され政務に携わり始めたハィンリヒは，喧騒公の死去後，バィエルン豪族の協力によりバィエルン太公に選出される[59]。彼は，オットー3世の死去を知るや早速，王座に即く決意を固め，国王の遺骸に付き添いつつ王国権標を手中にし，ケルン大司教ヘリベルトから「マゥリティゥスの槍[60] Mauritiuslanze」をも奪い去る。彼は，当初反抗的態度を

59） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.303 u. Anm.5. このことから当時バィエルンの豪族が太公選出権を持っていたことが分る。

60） 聖槍 Heilige Lanze とも言われ，日本の三種の神器に当たる王国権標 Reichsinsignien の一つ。1806年神聖ローマ帝国が崩壊するまで，王冠・十字架付き宝珠・王笏・王剣・聖槍などが王国権標とされるが，時代によってその内容は異なる。LMA, Bd. IV, Sp. 2020f. によれば，何故この聖槍が11世紀に王国聖人であるマゥリティゥスの槍と呼ばれるようになったかは不明で，聖槍が王国権標として用いられたのはハィンリヒ2世の即位の場合が最初。この聖槍は「ロ

取っていたヴォルムス太公オットーに自分の管轄下のケルンテン太公領の移譲を約し，彼を懐柔する。と言うのも，ヴォルムス太公オットーは，オットー大帝の孫――太公オットーの両親はオットー大帝の息女リゥトガルドとロートリンゲン太公コンラート赤毛公[61]――に当たるため，王座を狙うバイエルン太公ハインリヒ4世[62]にとって，血統上，ライヴァルになる可能性を秘めていたからである[63]。ハインリヒ4世は，1002年7月7日，即ちオットー3世の没後半年を経て，バイエルン，フランケン及び高地ロートリンゲン Oberlothringen の豪族の支持を受けてマインツ大司教ヴィリギスにより王冠を授けられ，ハインリヒ2世として東フランク王国王位に即く。「夢追い人 Visionär オットー3世の後をしたたかな現実政治家 zäher Realpolitiker ハインリヒ2世が襲った」という Alfred Wendehorst の表現[64]は，彼の即位

ンギヌス Longinus の槍」とも呼ばれることからも知れるように，聖槍伝説はヨーロッパに広範に存する。この聖槍はイタリアの支配権を象徴する，とされ，イタリアの豪族が高地ブルグンド国王ルードルフ2世に献上したもの，それをルードルフが，東フランク国王ハインリヒ1世からシュヴァーベン南部を授封されたのと引換えに，926年，ハインリヒ1世に贈った，と言われる。オットー1世はこの聖槍を手に955年マジャール人との「レヒフェルトの戦い」に臨んだ――聖槍は武運長久と弥栄を約するとされる。尚，オットー1世の2度目の妻アーデルハイドはルードルフ2世の息女（本稿67ページ参照）。

61） 本稿66ページ参照。

62） バイエルン太公ハインリヒ4世の父はバイエルン太公ハインリヒ2世喧騒公，祖父はオットー大帝の弟バイエルン太公ハインリヒ1世。従ってハインリヒ4世はリゥドルフィング家（＝オットー家）直系の男系子孫。

63） ヴォルムス太公オットーの他に，血統上，彼のライヴァルとされるのはシュヴァーベン太公ヘルマン2世 Hermann II.（*?–†1018/19）。LMA, Bd. IV. Sp. 2161 によれば，彼は母方を通して東フランク王国国王ハインリヒ1世の兄 Thangmar タングマル（†912以前）――本稿64ページに記述されているオットー大帝の兄タングマル（†938）の伯父――の玄孫と推定されている。彼は迫り来るハインリヒ2世軍を前に1002年10月1日降伏する。血統と関係無しに，マイセン辺境伯エケハルド Ekkehard が王座への名乗りをあげた。彼はオットー3世を支えた重臣の一人であったが，1002年4月30日彼は何らかの恨みが原因で惨殺された（LMA, Bd. III. Sp.1764f. による）。

64） LMA, Bd. IV, Sp. 2038.

経過からしても，彼の治世内容からしても，至言と言えよう。

即位後，彼は即位式に欠席したザクセン，ティーリンゲン Thüringen，低地ロートリンゲン Niederlothringen 及びシュヴァーベンの諸太公国を歴巡しその支配を固める。東国ポーランド対策でも彼は現実政治家の実を発揮し，スラヴ人の異教徒集団ルティーツェン[65]と反ポーランド[66]同盟を結ぶ。これはアルヌルフ悪玉公を思い起こさせる戦略であるが，これに対して国内から轟々たる非難の声が挙がる。彼は，それを意にも介さず，彼ら異教徒をも率いてキリスト教国ポーランドの国王ボレスラフ1世フロブリに三度に亙って襲い掛かる。結局，1018年の「バゥツェンの和約 Frieden von Bautzen」でハィンリヒ2世はボレスラフにミルゼン地域[67] Milsener Land とラゥジツ Lausitz を封として与えるに留まる。

---

65) ハィンリヒ2世によるルティーツェン（本稿註46参照）との協同行動は彼らスラヴ人の結束強化及び異教の復活を結果し，ハィンリヒ2世の後継者による彼らへの攻撃も，せいぜい，東フランク王国の主権の名目的承認，及び王国への朝貢義務の設定しか生まなかった。しかし1056/57年，ルティーツェン内部に主導権争いが発生，連合体としての機能は低下，12世紀半ばにザクセン部族の支配下に入る。

66) P. Rassow, Deutsche Geschichte im Überblick, S.126f. u. 129及び J. Fleckenstein, Deutsche Geschichte: Sonderausgabe, Bd. 1, S.168によれば，ポーランド国王ボレスラフ1世フロブリはボヘミアの王位を巡る混乱に乗じて君合国の形でボヘミアを併合，東フランク王国東境に一大スラヴ王国を誕生させる。これは従来からの東フランク王国との友好的路線を敵対的政治路線へと変質させるもの，と判断したハィンリヒ2世は，東フランク王国の利益擁護を最優先させ，このボレスラフの勢いに脅威を感じたルティーツェンと同盟した。これは，オットー3世の「ローマ帝国の復興 Renovatio imperii Romanorum」路線からハィンリヒ2世の金属印璽（1003年）にある「フランク王国の復興 Renovatio regni Francorum」路線への転換，いわばカール大帝当時の路線への復帰を意味する。これと関連するが，ハィンリヒ2世のローマでの皇帝戴冠も長期に亙って国を留守にしても心配の無い客観情勢が生まれた1014年2月になって初めて実現している。彼はローマや教皇座に殆ど口出しをしない。このような彼の対応がビザンツ帝国にイタリア南部への干渉を容易にさせた，とも言える。

67) LMA, Bd. VI, Sp.628f. 及び ebd., Bd. I, Sp.1692f. によれば，Milsener Land はスラヴ系ミルゼン人 Milsener 或は Milzener が居住した地域で，現在のバゥ

内政においてハィンリヒ2世は「国王にして祭司 rex et sacerdos」という神政観念に基づき，オットー大帝及びオットー3世の王国教会政策を引き継ぐ。既にカーロリング朝時代から，聖職者の間に聖職売買 simonia と妻帯・蓄妾 Nikolaitismus の悪弊が広がっていた。このような悪弊を放置すれば，教会はその司牧上の意義を失い，教会に依存する王国が結果的に崩壊しかねなかった。それ故，これまでもこれらの悪弊を排除する動きが聖俗双方から繰り返されてきた。古くは888年のマインツ教会会議，916年のホーェンアルトハィムの会議（本稿120ページ）などでシモニアが禁止され，909年のマインツ教会会議などでニコラィティズムが批判され禁止された。ハィンリヒ2世も1014年のローマ公会議でシモニアを禁じている。しかしながらその一方で，彼は，王権の支柱たる各司教区に寄贈を行い，その代償として教会側に対して王権への奉仕を求め，教会と王国の癒着を強めんとする。1004年[68]，彼はメルゼブルク司教区を再建，1007年，マイン上流のバンベルク Bamberg に司教区を創設して国境防備とスラヴ人宣教に備えるが，この創設により彼はマイン上流域を自己の権力の中心，王国教会の新たな戦力として活性化せんとした。彼は，彼の意に適う有能な司教や僧院長を起用し，王国教会諸機関を追認機関に堕さしめ，その一方で僧院改革運動を助成，王国教会に王権を定着させる努力をする。彼は子を成すことなく1024年死去，1146年，聖人に列せられる。彼の死をもってリゥドルフィング家，即ちオットー朝，の男系子孫は断絶する。

3. バィエルンとキリスト教

11世紀以後のキリスト教会及び東フランク王国を巡る諸変動について述

ツェン周辺。10世紀，バゥツェンはメルゼブルク（ザーレ河畔）とクラクフ Krakau を結ぶ通商路の中継点として栄えたため，近隣列強の干渉をしばしば受ける。尚，バゥツェン地域に現存するゾルベン人 Sorben はミルゼン人等の後裔，とする説もある（Brockhaus, Bd. 20, S.482）。

68） P. Rassow, Deutsche Geschichte im Überblick, S.128.

べる前に，ここでバィエルンとキリスト教との関わりを概観する。この概観は，当然のことながら，紀元前から約400年に亙ってアルプス東部及び北部前縁地を支配したローマ帝国の存在と密接に関わる。しかし本稿においてはできる限りバィエルンにおけるキリスト教を巡る諸問題に焦点を合わせることとし，具体的には，バィエルン，シュヴァーベン，フランケンにおいて司教区が成立するに至る8世紀過ぎまでについては，それら地域へのキリスト教の伝播及びそれら地域での教会組織の生成に的を絞り，9世紀以後については，一連の聖職者倫理の改革とローマ教皇座の関わりに論点を合わせて，凡そ11世紀末までのキリスト教を巡る問題を，便宜的に10項目に分けて，概括する。

紀元前15年頃以来，アルプス前縁地からドナウ河に至る地域がローマの支配下に入る。当時，ローマは北方からこの地域に迫って来るゲルマン諸族から身を護る必要に迫られていた。ローマは占拠した地域を属州化し，現在のスイスからイン河に至る地域を彼らはラェティア，その東部をノーリクムと名付ける。ライン河東部地域，つまりライン右岸地域，からドナウ河北方地域にかけては「自由ゲルマニア freies Germanien」と呼ばれた。紀元後3世紀後半から4世紀初頭にかけてノーリクムにアレマニア人，つまり後にシュヴァーベン人と呼ばれる民族集団，が流れ込んでくる。ローマ皇帝ディォクレティアーヌス Diocletianus（在位284-305）の治世下で，ラェティアはクール Chur を首都とするラェティアIとアゥクスブルク（ラテン名 Augusta Vindelicum）を首都とするラェティアIIに，ノーリクムはドナウ河畔ノーリクム Noricum ripense と地中海側ノーリクム Noricum mediterraneum に夫々分割される。それら各地域の統括者として，前二者各々に太公 dux が，後二者各々に長官 praeses が置かれる。ローマ末期にノーリクムで民政・軍政の双方を掌握していたのはキリスト教界の代表者だった，とされる[69]。

69) Wilhelm Störmer, Frühes Christentum in Altbayern, Schwaben und Franken, in: Walter Brandmüller (hg.), Handbuch der bayerischen Kirchengeschichte, Bd. I, 1, St. Ottilien, EOS-Verl., 1998. S.3.

アルプス北部にはローマ時代以前に既にケルト人の城砦都市 oppidum があり，それをローマは都市に発展させた。初期キリスト教は都市文化と密接な関係を持っていたので，アルプス北部にも2世紀以後のキリスト教伝播の痕跡があって良かろうと思われるが，その裏付けは未だ検出されていない。その原因は色々考えられようが，ディォクレティアーヌス帝のキリスト教徒迫害（303/304年）がその最たる原因をなすものであろう。この迫害によりパンノーニアの教会組織は破壊され，ドナウ河畔ノーリクムではローマの行政官，聖フロリアーヌス der heilige Florian がその犠牲になり，304年エンス河畔のロルヒ近傍で水死させられた，とされる[70]。聖フロリアーヌスの背後にキリスト教徒集団が存在したことは明らかである。アルプス前縁地ではアゥクスブルクに住んでいた聖アフラ die heilige Afra もこの迫害の犠牲になり，聖フロリアーヌス同様，304年に死亡した，と推定されている。彼女の存在及び彼女への信仰が明らかになったのは6世紀になってからのことである[71]。この両犠牲者信仰が後世に引き継がれたのも，313年，コンスタンティーヌス大帝がキリスト教の公認・国教化と信教の自由を保証するミラーノ勅令を発布したことが大いに貢献していよう。

ドナウ沿岸地域やアルプス前縁地のバィエルンやアレマニアのキリスト教の伝播状況は，スイスやライン地域におけるほどには，明らかになっていない。例えばスイスでは517年に既に最初の司教が存在したことが明らかになっている[72]。聖アフラ信仰の根拠地アゥクスブルクはラェティア II の首都であり，また都市文化と密着したキリスト教がこの地に定着していたことが考えられる以上，アゥクスブルクにも古代の司教座があった，と想定されるが，確認されるに至っていない。ローマ帝国の辺境域でキリスト教との関

70） W. Störmer, Frühes Christentum, S.5.

71） Ebd., S.5. によれば，詩人 Venantius Fortunatus の著した Vita S. Martini の中で，彼がラヴェンナからトゥールに向かった565年の巡礼の旅の記述において聖アフラ信仰について触れているが，彼女の生年等は不明。

72） Ebd., S.6.

連を窺わせる遺物が出土している地域は，アウクスブルク周辺，パッサウーレーゲンスブルク間のドナウ流域，そしてティロール Tirol のイン河谷 Inntal 及びアィザク河谷 Eisacktal の 3 ヶ所に集中している。このことから，キリスト教はアルプス地域及びその前縁地の主要道路に沿って伝播し，その地域の中心的都市を介して広まった，と想定し得る。これら地域へのキリスト教の伝播ルートは南東のシルミゥム[73] Sirmium からドナウ河経由，ラェティア II へは主としてイタリア経由，部分的にはフランス経由，が考えられよう[74]。バィエルン地域には古代後期の教会建築の遺跡が発見されていないが，その原因として，キリスト教徒たちの自己防衛本能も挙げられよう。彼らは，隠れた信仰に追い込まれていたため，ごくありふれた建物で礼拝を行った可能性があるのである。この種建築物の検出は考古学的には不可能であろう。しかしイン河谷ではかなり大きな 5 世紀の教会と推定される建築物が若干発掘されている[75]。

A. バィエルンの場合 1： バィエルンにおける初期キリスト教の比較的纏まった姿を我々が知り得るのは「聖セヴェリーヌス伝[76]」による。聖セヴェリーヌス der heilige Severinus（ドイツ名：ゼヴェリーン Severin, *?–†482）は，

73） シルミゥムはドナウ支流サヴァ河左岸にあった町。ここにはパンノーニア II の首都が置かれた（現セルビア領の町スレムスカ・ミトロヴィツァ Sremska Mitrovica)。前 1 世紀末ローマはビザンツ帝国及びアルプス東部に向かう要衝の地であるこのケルト人城砦都市を攻略，後 1 世紀にローマはこの地を重要な軍事拠点とすると同時に宮殿も設置，4 世紀後半にはここでアリゥス派の異端を決定づける公会議が度々開かれる。568 年ノーリクム及びパンノーニア地域に居住したランゴバルド人の北イタリア移住に伴ないアヴァール人がパンノーニアに入植，彼らは更に南に勢力を広げ，582 年シルミゥムを奪取する。しかしこの町は 796 年カール大帝により落城，アヴァール人は歴史の舞台から姿を消す。近年の発掘調査でローマ時代の遺構の概要が明らかにされてきている。

74） W. Störmer, Frühes Christentum, S.7.

75） Ebd., S.7.

76） 「聖セヴェリーヌス伝 Vita Sancti Severini」は聖セヴェリーヌスの弟子エゥギピゥス Eugippius が著した，とされる。

イタリアの出身[77]，ドナウ河畔ノーリクムやラェティアIIの東部で僧及び政治家として活動した身分の高い，影響力を持った人物で，ビザンツ帝国王室とも関係を持っていた，と言われる[78]。彼の主滞在地はファヴィアーニス Favianis（下オーストリア Niederösterreich のマゥタン Mautern か？）とされている。この地に彼は僧院を築き，それを基地に僧院集落を作って行く。その例としてパッサゥ近傍ボヨートロ Boiotro のセヴェリーン教会 Severinskirche が挙げられる。セヴェリーヌスは，開放的な性格だったらしく，その上，住民の生活向上にも意を用いたため，ゲルマン諸部族からも大いに信頼されたらしい。こういう彼の人となりがローマ人捕虜をアレマニア人から釈放させるのに役立った，とされている[79]。エゥギピゥスの報告によれば，ドナウ河畔ノーリクムのラテン系人，及び聖セヴェリーヌスが訪れた諸地域の住民はキリスト教徒であったらしい。例えば，パッサゥ（ラテン名 Batavis）西方の今日の村落キンツィング Künzing（ラテン名 Quintanis）は当時は大きな町で，この町のキリスト教徒は数が多かったらしく，エゥギピゥスは，その地の司祭・僧・助祭・副助祭・衛士 janitor，及び尼僧などについて述べていることからして，階層的に分化した教会組織のあったことが想定される。ローマの二つの属州ドナウ河畔ノーリクムとパンノーニアとの境界点に位置するパッサゥは，ドナウ河・イン河・イルツ河 Ilz の3河川が交わる交通の要衝で，パッサゥにある現在の尼僧院ニーダンブルク Niedernburg は，発掘調査の結果，5世紀頃，城砦の内側，嘗ての僧院ハイリヒ・クロィツ Heilig Kreuz の上に建てられたことが分り，発掘現場からはゲルマン地域との交流を証明する遺物も出土している[80]。

ドナウ河北部地域に広がる上パルツ Oberpfalz，フランケン地域にはキリスト教の痕跡は見当たらない。ローマはアゥグストゥス帝の時代に西方から

77） LMA, Bd. VII., Sp.1806.

78） W. Störmer, Frühes Christentum, S.8.

79） Ebd., S.8.

80） Ebd., S.8.

マイン河三角地帯 Maindreieck に侵入したが，直ぐ引き上げてしまったらしい。従って，ローマとの接点を持たなかったに等しいこの地域にはキリスト教の痕跡は窺えない。このことからしてキリスト教の影響はリーメス Limes の内側に限定される，と言えよう。しかしリーメスの内側においても，253 年から 260 年にかけてアレマニア人やフランク人による度重なる侵寇によりリーメスがその機能を完全停止するに及び，キリスト教の残滓すら失くなる。5 世紀後半，西方のドナウ河北部に居住していたアレマニア人やティーリンゲン人 Thüringer はその大多数が異教を信仰していたようであるが，東方のドナウ河北部に居住していたゴート人やルーギァ人 Rugier はアリゥス派キリスト教徒になっていた。聖セヴェリーヌスが良好な関係を結んだのはこのようなルーギァ人であった。

476 年，ローマ皇帝アゥグストゥールス Romulus Augustulus（在位 475–476）が東ゲルマン民族スキーレン人 Skiren の傭兵隊長オドアーカ Odoaker（在位 476–493）に帝位を奪われ，ローマ帝国は瓦解する。フランク王国では国王クロードヴィヒ 1 世 Chlodwig I.（在位 481–511）が 486 年ローマのガリア総督シャグリゥス Syagrius を打ち破る。これら一連の激動はローマ教皇座の影響力を益々強める。それまでアリゥス派教徒だったフランク国王クロードヴィヒ 1 世も，オドアーカを破って東ゴート王国 Ostgotisches Reich を建国した国王テオーデリヒ Theoderich（在位 474–526）の後継者ヴィティギス Vitigis 或は Witigis（在位 536–540）も，カトリック信仰に改宗する。ランゴバルド王国の場合，上層部・民衆共にアリゥス派とカトリック信仰の間を行き来するが，589 年国王アゥタリがバィエルン太公ガリバルド 1 世の息女でカトリック信徒テゥデリンデを妃に迎えて以後，カトリック信仰に定着する。フランク国王テゥデベルト 1 世 Theudebert I.（在位 533–548）が 545 年頃「余は神 Gott の加護により大洋の波打ち際からドナウ沿岸・パンノーニアにまで広がる王国を建設した」とビザンツ帝国皇帝ユスティニアーヌス 1 世 Justinianus I.（在位 527–565）にその勢威をひけらかすとき，テゥデベルトの言うそれら地域においては，バィエルン，アレマニアを中心として，その上層

部がカトリック化されていた，と考えて大過あるまい。これら地域で古ゲルマン人の異教の神々が克服されるのは凡そ700年頃，つまりカーロリング家宮宰がメーロヴィング朝フランク王国の実権を掌握した頃，とされる。この時点を境に墓所に副葬品が見られなくなり，副葬品を排除するキリスト教の埋葬方式が広まる[81]からである。

さて，ローマ帝国は瓦解してもバィエルン地域にはローマの豊かな遺産が遺された。諸地域を横断する道路網は無傷であったし，古代の中心的諸都市，レーゲンスブルク，パッサゥ，ザルツブルクも生き長らえ，6世紀半ば以後これらの都市はバィエルン太公国及びその教会を支える拠点となる。一方，フランク王国は6世紀末に集中的に東部アルプスのキリスト教化政策を推し進めるが，彼らの努力も空しく終る。と言うのも，彼らが建設した東ティロール Osttirol やケルンテンの司教区も600年頃にはスラヴ人の侵入のため消滅してしまうからである。この頃アルプス前縁地を訪れたのがエゥスターシゥス Eustasius で，彼はボッビォにいたアィルランド人聖コルムバーヌス der heilige Columbanus（ドイツ名：コルムバーン Kolumban, *543–†615）から指示を受けてアルプス前縁地を訪れた。彼は多数の信者を獲得する。このエゥスターシゥスの宣教活動がバィエルンにおける文書に記録された最初の宣教活動となる[82]。これらの宣教活動は従来「アィルランド・スコットランド系の iro-schottisch」と呼ばれて来たが，「アィルランド・フランク系の iro-fränkisch」と呼ぶ方が適切，との主張が近年なされている。その根拠は，アィルランド人僧らの大陸での活動が成果を収めたとすれば，それは，彼らがメーロヴィング王家の支持を得られた故，及び，聖コルムバーヌスを祖とするアィルランド系僧院もフランク王国においては速やかにフランク化された故，というもの[83]。バィエルンでのアィルランド・フランク系宣教活動に

81） Ebd., S.14.

82） Ebd., S.17.

83） Ebd., S.17. 同様の見解を Friedrich Prinz もその著書 Grundzüge der Entfaltung des abendländischen Mönchtums bis zu Karl dem Großen, in:

ついては，文献上の記録は殆ど無いが，民間伝承・信仰には残されているようである。例えば，鐘の鋳造技術に優れていたアイルランド人の造った鐘がイルシェンベルク Irschenberg（ミュンヒェン南東 40km）近傍の僧院ヴィルパルティング Wilparting にある，とされていたり，アイルランドの聖人モヌス Monus は梅毒の守護聖人，またアイルランドの僧フォルトヒャン Fortchern は今日でも鐘鋳造者の守護者とされたり，その他，アイルランド人は農業においても様々な事象の守護者となる。これらは，彼らが伝道の際，病の克服・農作への助言に意を用いたことに発するのであろう[84]。

エゥスターシゥスの努力はあったものの，バィエルンに当時どの程度キリスト教が根づいていたかは明らかでなく，その状況を知るには，コルビニアーヌス Corbinianus （ドイツ名：コルビニァーン Korbinian, *700 以前-†728/730）がレーゲンスブルクに到着したときのフラィジング司教アルベォによる「コルビニアーヌス伝」の記述：「司祭たちはこの地（＝バィエルン）で高

Johannes Erichson (hg.), Kilian, Mönch aus Irland - aller Franken Patron: Aufsätze, München, Haus der Bayer. Geschichte, 1989, S.119 で表明している。キリスト教を国家宗教と観じ確かな文献史料に基づいて分析する場合には「アイルランド・フランク系」という形容も適切であろうが，アイルランド系僧院自身が「スコットランド人僧院 Schottenklöster」（レーゲンスブルクに根付いた僧団でハィンリヒ 4 世の保護を受けた）を名乗っていることも考え合わせると「アイルランド・スコットランド系」という表現もそれなりの意義を持とう。フランク王国の影響を重視するとなると，ドイツ史などの叙述の際，随所で「フランクの」という形容が必要になろう。

84) Romuald Bauerreiß, Irische Frühmissionäre in Südbayern, in: Joseph Schlecht (hg.), Wissenschaftl. Festgabe zum 1200jährigen Jubiläum des hl. Korbinian, München, Anton Huber, 1924, S.47ff. 21 世紀に入った今日のこれら伝承の姿を現地調査するゆとりは，残念ながら，筆者に恵まれなかった。

85) F. Brunhölzl, Vita Corbiniani, S.109.

86) リクセーユ Luxeuil 僧院の影響下にあった Emmeramus（ドイツ名：エメラム Emmeram）は，彼の伝記「聖エメラームス伝 Vita et passio Sancti Haimhramni Martyris」（772 年）を著したアルベォによれば，7 世紀末にレーゲンスブルクに宣教に来る前はポァティエ Poitiers 司教を務めた。彼はバィエルン太公テーォドから教会組織化の任を与えられるが，数年後（714 年？）太公

く評価されていた[85]」，或いは同じくアルベォによる「聖エメラームス伝[86]」の叙述：「バイエルンには既に多数の聖職者が居た」などから推測する以外に無い。ここに述べられている聖職者が，どこで教育を受け，どこからバイエルンに来たか，は分っていないが，彼らの一部がアイルランド・フランク系宣教の流れを汲んでいることに疑問はない。

エメラームスと異なって，その宣教活動ゆえに高く評価される聖人がザルツブルク司教ルペルトゥス Rupertus （ドイツ名：ルーペァト Rupert, *?-司教 696?-†718?）である。彼は晩くも 695/696 年にはバイエルンを訪れていたようで，太公テーォドに招かれてレーゲンスブルクに来るが，彼はレーゲンスブルクを早々に後にし，エンス河口のロルヒを経て，太公から拝領したユヴァーヴム Iuvavum（＝ザルツブルク）に入る。このとき既に城砦にはマルティーン教会 Martinskirche が存在していた。696 年頃，ザルツブルク司教となった彼はノンベルク Nonnberg を建立する。この尼僧院は，文献上，バイエルン初の尼僧院とされる。 僧院ザンクト・ペータ St. Peter が彼の手に成ったかどうか，彼は単にそれを改修したのみかどうか，は明らかではないが，ザルツブルクの遙か南方ポンガゥ Pongau のビショフスホーフェン Bischofshofen にあるマクシミーリァン僧院 Maximilianszelle は彼とラテン系のある家族によって 711 年頃造られたことは明らかになっている。ザルツブルク地域には 715 年以前に既に三つの僧院が建立されていた訳である。このような聖ルペルトゥスの活動から我々は，ザルツブルク及びその周辺には当

の息女ウータ Uta を誘惑し妊娠させた，との濡れ衣を着せられ，その兄ラントペルト Lantpert により拷問の上惨殺される。W. Störmer, Frühes Christentum, S.20 にあるように，エメラームスが聖人になったのはこの惨殺事件によるのであって，彼の布教活動から来るものではない。エメラームスがレーゲンスブルクに居たのは前述の伝記によれば 3 年間。彼の没年については，8 世紀後半説，714 年説，652 年説等，様々な議論がある（W. Störmer の上述書 S.21）。尚，「司教」について付言すれば，当時の司教は，若干例を除けば，国王や太公，ローマ教皇から任命されるのではなく，当該地域の聖職者会議等で聖職者により選出された。

時既に多くのキリスト教信者が存在した，と推定してよい。バィエルン太公テーォドは，領国政策に積極的に取り組むと同時に，各領域のカトリック信仰の芽生えを大切にし，教会政策にも先進的に対応した，と言えよう。

B. シュヴァーベンの場合1： アラマンニ Alamanni の名が史料に初出するのは213年で[87]，この年，ローマのカラカラ帝 Caracalla（在位211–217）はマイン河畔で騎馬による戦いに優れたゲルマン人と戦う。このゲルマン人集団がアラマンニ，所謂アレマニア人 Alemannen であった。彼らは，シュヴァーベン人 Schwaben とも呼ばれているところから，ゲルマン人の一部族スエーベン人 Sueben 或は Sweben の出自と推定されている。その居住域がアレマニア Alemannien，シュヴァーベン Schwaben とも呼ばれる所以である。彼らはマイン河畔にその居住域を拡大・確保し，233/234年頃から十分の一税地域[88] agri decumates に侵入，259/260年にはリーメスを突破，ドナウ河越えを果たして入植地を拡大する。270年頃にはゲルマンの一部族ユートゥング族 Juthungen もアレマニア人に合流する。当時のアレマニア人は国王を持たず諸部族が分立する[89]が，諸部族の首領たちは相互に血縁関係にあり，その政治力・軍事力で他の豪族たちを上回る，という諸部族中心体制の元に暮していたようである。456年には彼らの存在がライン左岸で記録され[90]，彼らはこの頃には，東ゴート王国国王テオーデリヒ Theoderich（在位451–526）の統治下に置かれていた模様で，その庇護の元，エルザス Elsaß,

---

87） Johannes Hoops (hg.), Reallexikon der Germanischen Altertumskunde（以下 RGAK と省略), Bd. 1, Straßburg, Verlag von Karl J. Trübner, 1911–13, S.57.

88） Dekumat[en]land とも言われ，ライン右岸のマイン下流域辺りからドナウ上流域に達する地域を言う。

89） RGAK, Bd. 1, S.58 によれば，Brisigavi 族はライン上流フライブルク Freiburg 周辺のブライスガゥ Breisgau に，Lentienses 族はボーデン湖の北岸リンツガゥ Linzgau に，Bucinobantes 族はマインツ周辺に，それに Raetia との関連で名を得た Raetobarii 族等が分立した。

90） RGAK, Bd. 1, S.59.

パルツ Pfalz に侵入，或いはパッサゥまで侵出してドナウ南岸に植民を試み，南方では現スイス Schweiz をも勢力下に収める。

このようなアレマニア人の勢力拡大は，当然，西方のフランク人との軋轢を生む。496/497 年以後，フランク国王クロードヴィヒ 1 世はアレマニア人と戦いを構える。アレマニア人との戦いで九死に一生を得，更にフランク軍を勝利に導いた異教徒クロードヴィヒは，これを機会にカトリックに宗旨替えする。彼の妻，ブルグンド王女で敬虔なカトリック教徒クロティルデ Chlothilde の影響に重ねて，若い時からのランス司教レミーギゥス Remigius (*438–†533?) との良好な関係もこれには作用していたであろうが，フランク国王のキリスト教入信はゲルマン世界にキリスト教を広める大きなキッカケとなる。536/537 年に東ゴート王国が滅亡すると，時のフランク国王テゥデベルト 1 世はアレマニア人をその支配下に置く[91]。フランク王国はアレマニアに太公制度を導入，フランク国王により太公が任免されることとなる。最初の太公及び軍司令官にアレマニア人の中から二人の兄弟レゥタリ[92] Leuthari（生没年等は不詳）とブティリン Butilin（生没年等は不詳）が任ぜられる。539 年テゥデベルト 1 世の命によりイタリアに出兵したこの両人は，553 年頃以降，イタリアで自立性を高める。フランク国王テゥデバルド[93]がビザンツ帝国への配慮からイタリアへの深入りを避けたのに対し，この二人はイタリアを蹂躙する。しかしフランク王国にとって大事に至らぬうちに，レゥタ

91） W. Störmer は Frühes Christentum, S.26 で，東ゴート王国・フランク王国・アレマニア・バィエルンの 4 者の関係について，ごく簡単に纏めれば，以下のように述べる：536/537 年に東ゴート王国が滅亡して初めてテゥデベルト 1 世はアレマニアをその支配下に置くことができたのであり，またアレマニアがフランク王国に服属して初めてバィエルン太公国が誕生することとなる，と。的を射た発言である。

92） LMA, Bd. V, Sp.1921 によれば，レゥタリはダーゴベルト 1 世及び宮宰大ピピーン Pippin der Ältere の死（639 年）後，アゥストリア Austria 宮廷内の陰謀に介入した。

93） 本稿 53 ページ参照。

リは病に倒れブティリンは兵と共に敗死する。その後もアレマニア人の太公たちがアレマニアを総括するが，それら太公がカトリック信徒であったことは疑い無かろう[94]。

フランク王国はアレマニアにおける活動拠点を，フライブルク南方で大きく東方に屈曲して上流に向かう辺りのライン河南部及びボーデン湖 Bodensee 周辺に置いた。その理由は，この地域には長期に亘って既にローマの風習及びキリスト教が伝播し，それが彼ら支配者に有利であったからで[95]，この地域――アルプス北側の現スイス地域――は文化的にも宗教的にもアレマニアの核を成していた。クロータル 2 世及びその子息ダーゴベルト 1 世 Dagobert I.（アゥストリア国王在位 623–632，ノィストリア及びブルグンド国王在位 629–639）は，当時その多くが未だ異教徒であったアレマニア人を宣教するため，チューリヒ Zürich 西方のヴィンディシ Windisch 司教区をボーデン湖畔のコンスタンツ Konstanz に移す。

先に触れたアィルランド・フランク系宣教者聖コルムバーヌスは，590 年頃アゥストリアに接するブルグンドの町リクセーユに僧院を建立，そこを彼の宣教基地としていた。彼及び彼を信奉する僧たちの厳しい禁欲生活はメーロヴィング朝国王及び地元豪族の支持を生む。しかし彼は，メーロヴィング朝国王から彼の建立した諸僧院をフランク王国の既にきっちり固まった階層的教会組織の中に組み込むよう求められたとき，それを敢然と拒否する。彼は更にテゥデリヒ 2 世 Theuderich II.（ブルグンド国王在位 596–613，アゥストリア国王在位 612–613）の不行跡を厳しく批判，王の庶子に対する祝福を拒絶し，609/610 年，彼はリクセーユから追われる[96]。610 年彼はボーデン湖に腰を落着け，聖ガルス Sankt Gallus（*?–†650?）と共にアレマニア領内を宣教するが，この地におけるコルムバーヌスの宣教は成果を挙げた，とは言い難い。即ち，ブレーゲンツ Bregenz はゲルマン人居住域とラテン系人居住域の境に

94） W. Störmer, Frühes Christentum, S.26.

95） LMA, Bd. I, Sp.264.

96） Ebd., Bd. III, Sp.65f.

位置し，その地のアレマニア人はカトリック信仰を受入れはするものの異教の神々崇拝から遠ざかりもしなかった。ところが，妥協を知らぬ聖コルムバーヌスは，ブレーゲンツのアウレーリア教会 Aurelia-Kirche に置かれていた異教の神々の三つの像を撤去する。この事件は地元民との対立を敵対的関係にまで悪化させてしまい，彼はブレーゲンツを去る。彼はランゴバルド王国を経て，613年，ランゴバルド国王アギルルフ及びその妃テウデリンデ（本稿53ページ参照）の元に身を寄せ，彼らからカトリック僧院ボッビオの建立を許される。フランク王国を統一したクロータル2世 Chlothar II.（ノィストリア Neustria 国王在位 584–629，ブルグンド国王 613–629，アウストリア国王在位 613–623）はコルムバーヌスを王国に呼び戻そうとするが，それは果たせなかった。彼はその後間も無い615年にボッビオで死去する。

一方，聖コルムバーヌスのアレマニアにおける同伴者であった聖ガルスの宣教は著しい成果を挙げる。ガルスはボーデン湖南岸アルボン Arbon 近傍のシュタィナハタール Steinachtal で隠遁生活を送りつつ，ここを基地に彼は布教活動を繰り広げる。リクセーユから宣教者が来る以前に既にコンスタンツには司教座が置かれていたが，この司教座の司教職が前任者の死去により空席になったとき，ラェティア生まれのヨハネス Johannes がその後任に任じられた。このヨハネスを推薦したのがガルスだった[97]。隠遁者たる聖ガルスは，聖コルムバーヌスが抱いた僧集団の理念をアレマニアの地で現実化した，とされる。

メーロヴィング朝フランク王国はクロードヴィヒ2世 Chlodwig II.（ノィストリア及びブルグンド国王在位 639–657，アウストリア国王 656–657）の治世を経て衰退に向かう。フランク王国の国有地は一部アレマニア人により私領化され豪族が力を得る。カーロリング家宮宰中ピピーン Pippin der Mittlere（在職 687/688–†714）及びカール・マルテル（在職 720 以前–†741）は，アレマニアにおけるフランク王国支配の再興を意図し，アレマニア太公ゴトフリド Gott-

97） W. Störmer, Frühes Christentum, S.27.

frid（*?–†709）が709年に死去すると，宮宰中ピピーンは数次に亘ってアレマニアを攻撃する。アレマニア人は屈服しない。この間を縫って719年頃聖ガルスに因んだ僧院ザンクト・ガレン St. Gallen がアレマニア人オトマー Otmar により建設される。722年のカール・マルテルのアレマニア攻撃の後，723年カーロリング家宮宰によるフランク王国支配に反抗する暴動が起こる。それが鎮圧されると太公側とフランク王国宮宰との間に休戦状態が続いたようで，その間の724年頃，僧院ライヒェナゥ Reichenau が宮宰カール・マルテルとピルミーニゥス Pirminius（*?–†755）により建立・完成される。カール・マルテルの僧院建立の意図はこの僧院を自分の支配拠点として活用することにあり[98]，彼は僧院長にピルミーニゥスを起用するが，ピルミーニゥスは727年にゴトフリドの子息で太公のラントフリド Lantfrid（*?–†730）によりライヒェナゥから追い出される。この追い出し騒ぎはカール・マルテルを刺激し，730年カール・マルテルとの戦闘でラントフリドは死去する。

考古学はレヒ河までのアレマニアにおけるキリスト教の広まりをどう判断するか，というと，死者の埋葬状況からすると，7世紀末，或いは場所によっては8世紀初頭まで，アレマニア全域において副葬品を伴う異教的埋葬法が行われていたが，その後，教会周辺での埋葬は副葬品を伴わないキリスト教的埋葬に替わる。とは言うものの，副葬品を伴う埋葬が行われたアレマニア人の間にもキリスト教徒の存在が推定できる，とする。その根拠は，富裕層の墓地で，遺体に掛けられた布に金箔を十字形に切った金箔十字 Goldblattkreuz が縫い込まれ，副葬品として用いられていることである。この金箔十字はランゴバルド地域から伝わったもので，アルプス北部ではアレマニアにのみ出土している。その出土地域は広範に亘り，ライン上流域から東はレヒ河まで，北はネッカー Neckar 流域からリース Ries 地方（凡そヴェルニッ Wörnitz 流域）にまで及ぶ（尚，キリスト教徒の副葬品としては7世紀頃の胸飾り十字 Pektoralkreuz がフランケンのタゥバー河谷から一つ出土している[99]）。アレマ

98） LMA, Bd. I, Sp.265.

99） W. Störmer, Frühes Christentum, S.30.

ニアの場合，バィエルンにおけるよりもラテン系文物が継承された痕跡は少なく，カトリック信仰は主として豪族の居所に根付き，そこから彼らの支配領域に広まった，と考えられる[100]。

C. フランケンの場合1： フランケン Franken は現バィエルン州の北西部に広がる地域で，ラヴェンナの地理学者[101] Geographus Ravennas の言う Ascapha と Uburzis がアシャフェンブルク Aschaffenburg とヴュルツブルク Würzburg に当たるならば[102]，マイン下流域とヴュルツブルク周辺は，フランク国王クロードヴィヒ1世がアレマニアに勝利した500年頃には，メーロヴィング朝支配下に置かれた，と判断されるが，フランケンの大部分はティーリンゲン王国 Thüringerreich 領だった。同王家にはアリゥス派キリスト教並びにカトリック信仰が入っていた。が，そのような信仰を持ったのは王家の一部に過ぎず，領民全体にキリスト教信仰は広がっていなかった，と考えられる。アレマニア人の元に広まった金箔十字もフランケンからは出土していない[103]。ライン左岸に位置するマインツの司教は6世紀半ばにライン右岸のマイン河との合流点に既にキリスト教信仰の始まりを見て，マイン上流域の宣教に入る。同様にヴォルムスの司教もネッカー河沿いに上流に向かって宣教工作に入る。これら6世紀及び7世紀におけるライン右岸の宣教がどの程度成果を挙げたかは，しかしながら，まったく不明である[104]。

100） Ebd., S.29f.

101） LMA, Bd. IV, Sp.1270f. によれば，Anonymus Ravennas とも der Geograph von Ravenna とも呼ばれる地理学者で，700年頃に古代及び初期中世の史資料を基にしてインドからアフリカ・ヨーロッパに亙る地図をラテン語で作成した。彼の地図は読まれもし評価も受けたが，後世へは影響は少なかった。

102） W. Störmer, S.30.

103） Ebd., S.30.

104） Ebd., S.31.

105） LMA, Bd. V, Sp.1136f. によれば，アィルランドでの司教の地位を捨てたキリアーヌスを含めて12名の宣教者がヴュルツブルクに来る。彼らの目的は「わたしの名のために，家，兄弟，姉妹，父，母，子，或いは畑を捨てた者はすべて，その幾倍もを受け，また永遠のいのちを受け継ぎます」（聖書・新改訳，日本聖書

7世紀後半，アィルランド人宣教者キリアーヌス[105] Kilianus（ドイツ名：キーリァンKilian，*?-†689?）がフランケンのマイン中流域の宣教に入る。キリアーヌスの伝記「キリアーヌスの受難Passiones Kiliani」2書はマイン中流域におけるキリスト教宣教の様子を伝える唯一の史料であるが，具体的データに乏しく，我々がこれらから知り得るのは，キリアーヌス及び11名の同行者の，キリストの教えに無条件的に従わんとする強い主観的意思のみで，フランケン領民の宣教については殆ど知り得ない。当時のヴュルツブルクは一つの太公領を形成し，ヘーデン家[106]が4代に亙って太公を出していた。キリアーヌスが宣教に成功したのはヘーデン家第3代太公ゴッベルトとその取り巻きに関してのみであろう。

次ぎに外国人宣教者としてフランケンに入ったのはアングロ・サクソン系

刊行会，いのちのことば社，1971年，「マタイの福音書」第19章第29節）というキリストの教えを絶対的に実践することにあった。キリアーヌスの受難はフランケン太公家の婚姻問題への介入に起因する：彼はヘーデン家Hedene第3代目の太公ゴッベルトGozbert或はGozbaldに，その妻ゲィラナGeilanaと離別するよう求める。というのも，ゲィラナはゴッベルトの死んだ兄弟の妻だったからで，この種の婚姻は，ローマ法やゲルマンの慣習では問題にならなくても，教会法では許されなかった。これを知ったゲィラナはキリアーヌスと彼の同伴者コロナトColonat及びトトナンTotnanを奸計にかけて殺させる。この受難によりキリアーヌスは特にマイン・フランケン地域で崇拝され，アィルランドでも9世紀にはキリアーヌス信仰が生まれる。キリアーヌスは「フランケン人の使徒Frankenapostel」とも呼ばれる。キリアーヌス信仰は，従って，エメラームス信仰と似たような性格を持つ（本稿註86参照）。

106) LMA, Bd. IV, Sp.1985によれば，ヘーデン家は後期メーロヴィング朝時代にヴュルツブルク周辺のマイン河地域及びティーリンゲンにおいて太公職に就き，初代がフルォディHruodi，続いてヘーデン1世Heden I.，ゴッベルト，ヘーデン2世Heden II.で終る。ヘーデン1世は642/643年にフランク王国と共同行動をとってティーリンゲン征圧に貢献し，更に「リブアリア法典Lex Ribvaria」の立法者としては只一人その名が知られている。8世紀に入るとヘーデン2世が第4代太公職に就く。彼は妻テォドラダTheodradaと協力してアングロ・サクソン系宣教者ヴィリブロルドを助けその仕事を成功させる。ヘーデン2世については717年頃にその名が記録されているが，彼はその直ぐ後カール・マルテルの策動により解職される。

宣教者ヴィリブロルド Willibrord（*657?–739）で，ヴュルツブルク最後の太公ヘーデン2世が彼に協力した。ヘーデン2世はヴュルツブルク城砦に僧院・尼僧院を建立し，教会組織化にも手を染め，ティーリンゲンを宣教するヴィリブロルドらに，704年ティーリンゲン内の自らの所領をその物的基盤として提供したりしてもいる。しかし719年，ヴィリブロルドはその目をフリースランド Friesland に向けることになる。と言うのも同年，ヘーデン2世がティーリンゲンの豪族との紛争に起因して太公位を失い，フランケン地域の政治的中心が消滅したからで，この事変によりフランケンのキリスト教化は旧の木阿弥に戻る[107]。

考古学はフランケンの状況をどう判断しているか，と言うと，嘗ては，フランケンでは650年から800年にかけて墓所の副葬品が徐々に減少しやがて完全に無くなる，と想定したが[108]，現在では，凡そ700年頃，晩くとも8世紀に入って直ぐ，ハスベァゲ Haßberge 及びシュタィガーヴァルト Steigerwald 西方のフランケンに関しては，列状墓地 Reihengräber での副葬品を伴う埋葬は，ヘッセン，アレマニア，バィエルンにおけると同様，殆ど完全に消滅する，と判断している[109]。

D. バィエルンの場合2： バィエルンでは，先に見たように，バィエルン太公テーォド（在位680?–717?）の子息ラントペルトが聖エメラームスを拷問にかけ殺害したため，テーォド太公の宿願であるバィエルンにおける教会組織確立問題が頓挫してしまう。715/716年テーォドはローマに旅立つ。この旅は巡礼の旅とも贖罪の旅とも言われるが，この当時フランク王国は，宮宰中ピピーンの死（714年）後，異教徒フリーゼン人 Friesen やザクセン人を巻き込んでのノィストリアとアゥストリアの対立，及びメーロヴィング家内部の跡目争いで大混乱に陥っていた[110]。偶然のことながら，この状況は太公

107） W. Störmer, Frühes Christentum, S.74.

108） RGAK, Bd. 2, Straßburg, Verlag von Karl J. Trübner, 1913–15, S.83.

109） W. Störmer, Frühes Christentum, S.35.

110） 中ピピーンの庶子カール・マルテルが宮宰職に就くのは720年頃か，その直前。

テーォドにとって政治的に非常に有利であった。彼はローマで教皇グレゴリゥス2世（在位715-731）とバィエルンにおける教会組織建設について話し合い，教皇座の意向を尊重しつつバィエルンの司教区の設定や司教・大司教等の人的配置を行なうことを取り決める。この取り決めによりローマとバィエルン太公国の結合は強められる。しかしテーォドがこの取り決めを具体化できないでいたとき，フランク王国の中核地帯であるセーヌ河中流域出身の宣教者聖コルビニアーヌス（*700以前-フラィジング司教725?-†730?）がレーゲンスブルクにテーォドを訪ねて来る。テーォドは彼を歓迎する。太公テーォドのコルビニアーヌス歓迎は，キリスト教の宣教成果と同時に，バィエルンの教会組織化を期待してであったろう[111]。太公テーォドの没後，聖コルビニアーヌスはフラィジングに部分太公グリモァルドを訪れる。彼からもコルビニアーヌスは熱烈な歓迎を受ける。コルビニアーヌスは太公邸内のシュテファン教会 Stephanskirche が在った所に僧院ヴァィエンシュテファン Weihenstephan を建立する。だが，その後，彼はフラィジングから南ティロール Südtirol のマィス Mais 近傍のクーェンス Kuens に居を移してしまう（クーェンスに彼はグリモァルドの援助を得て720年僧院ヴァレンティン Valentinszelle を建立していた）。転居の理由として，彼が太公グリモァルドと公妃ピリトルードの婚姻[112]を批判したことを挙げることができようが，当時，即ち725年頃には，バィエルン太公国の跡目争いに目を付けたカール・マルテルがバィエルンに介入してきたし，謀殺によるとも言われるグリモァルド太公の死亡事件もあったし，等でバィエルンは大揺れに揺れていたという事情も絡んでいたようである。コルビニアーヌスのクーェンスへの転居は，避難でもあったらしい。その後，彼はフラィジングに復帰するが，間も無く死去，遺骸はクーェンスに葬られる。因みに，レーゲンスブルクの聖エメラームス，ザルツブルクの聖ルペルトゥス，フラィジングの聖コルビニアーヌスは，宣

111） W. Störmer, Frühes Christentum, S.38f.

112） ピリトルードはグリモァルドの死亡した兄弟テーォドアルドの妻であった。この種の婚姻は，本稿註105にあるように，教会法では許されない。

教史上「バイエルン人の三使徒 drei Apostel der Bayern」と呼ばれる。

グリモァルドの死後，全バイエルン地域を統治することになったフクベルトが 736 年に死去すると，アレマニア太公ゴトフリド（*?–†709）の子息オーディロ（在位 736?–748）がバイエルン太公位を継ぐ。彼はフランク王国宮宰カール・マルテル（在職 720 以前–741）とも良好な関係にあったため，教会組織の策定において大きな行動の自由を獲得する。彼は，739 年，行動的で有能な聖職者ボニファーティウスをバイエルンに招く。既に教皇特使に任ぜられていたボニファーティウス[113] Bonifatius（*672/675–†754）は，嘗てバイエルン滞在中[1]（733/735 年）に得た諸種情報を勘案し，同年，太公オーディロと共に，テーォド太公時代の教会組織化案に基づいてバイエルンを 4 分割し，レーゲンスブルク司教区，フライジング司教区，ザルツブルク司教区及びパッサウ司教区を設定，前 3 者について各々その司教を任命，パッサウ司教についてはその任命をローマ教皇に委ね[114]，4 司教座の設置，4 司教の任命

113） LMA, Bd. II, Sp.417ff. によれば，ボニファーティウスの本名はヴィンフリード Winfrid。彼はエクセタ Exeter 出身のアングロ・サクソン系宣教者で，716 年春使命感に燃えてフリースランドの宣教に赴くもフランク王国の支援を得られず失敗に終る。719 年ローマ教皇は彼に宣教の全権とボニファーティウスの名を与える。721 年ヘッセン，ティーリンゲン地域の宣教に従事，722 年宣教上の必要から彼は教皇に服従誓約を行って教皇から司教が持つ聖別権・司法権を得る。723 年以後はカール・マルテルの宣教許可証を得てヘッセン Hessen，ティーリンゲン地域の宣教を完成，その証としてフリツラー Fritzlar 近傍のガィスマー Geismar に聳え立つカッテン族の部族神ドーナル Donar（＝雷神）に捧げられたナラの木を切り倒す。732 年彼は教皇から司教に任ぜられ，教会法に基づく新司教区設定権・大司教任命権を手にし，737/738 年には教皇特使に任ぜられる。これに基づき彼はバイエルンの教会組織を完成させ，更にカール・マルテルの長子でアゥストリア宮宰カールマン Karlmann（在職 741–747–†754）の援助も得てヴュルツブルク，ビーラブルク Büraburg，エァフルト Erfurt の司教区も設定する。前 2 者はその後マインツ司教区の許に統合される。ボニファーティウスは「ドイツ人の使徒 Apostel der Deutschen」と呼ばれるに相応しく，その後のドイツに纏まる様々な地域にその足跡を残したが，754 年 6 月 5 日，彼の同伴者共々盗賊に撲殺される。彼は今もフルダ Fulda 僧院に眠る。

114） LMA, Bd. II, Sp.418 及び Ebd., Bd. VIII, Sp.1786 によれば，バイエルンの 4

を果たす。但し，フライジングでは既に725年頃から730年まで聖コルビニアーヌスが，ザルツブルクでは696年頃から718年まで聖ルペルトゥスが，718年から725年まではヴィターリス Vitalis（生没年等は不詳）が，パッサウでは731/736年から746/747年までヴィヴィロ Vivilo（*?–†746?）が夫々司教になっていた，という記録[115]を考慮するならば，ボニファーティウスは，テーォド太公（在位680?–717?）からグリモァルド部分太公（在位*?–†725/728?）を経てフクベルト太公（在位725/28?–736?）に至るまでの諸太公によって積み重ねられた成果を引き継いでバィエルンの教会体制を整えた，と言えよう。しかし，バィエルンに点在した教会が各司教座教会の許に既に系列・区分化されていたかというと，そういうことはなく，各教会は，一部は7世紀にまで遡る各地域の豪族や太公による私有教会制度 Eigenkirchenwesen により細分化されていて，所謂，下位（＝教区）教会制度 Niederkirchenwesen は成立していなかった[116]。従って，各司教座は739年以後これら私有教会の獲得，系列・区分化に努力する（その手法は，私有教会を司教座教会に寄贈させた後にその教会を封として寄贈者或いはその身内に授ける，等の授封方式，と推定される。これは若干の例から言えることで，史料が乏しいため実態はこの後の時代についても不明としか言いようがない）。聖ボニファーティウス及び太公オーディロの手によって誕生したこれら司教座は，タシロ3世時代においても，カール大帝によるバィエルン併合後においても，東方地域のキリスト教化に大役

司教区設定時，教皇グレゴリウス3世 Gregorius III.（在職731–741）により司教に任命されたのはヴィヴィロのみで，彼はパッサウの初代司教。

115) Walter Brandmüller (hg.), Handbuch der bayerischen Kirchengeschichte, Bd. I, 2, St. Ottilien, EOS-Verl., 1999. S.1201ff. によれば，その他の地域で739年以前に司教が置かれたのはアウクスブルクとゼーベン・ブリクセン Säben-Brixen（ザルツブルク司教区の属司教区）で，前者には4世紀から Zosimus / Dionysius 以下6名の司教が置かれ，738?年から772年までは Wikterp が司教。後者には575年頃 Materninus (Marcianus)，591年頃聖 Ingenuinus，8世紀中頃 Mastulo Johannes の各司教が置かれていた。

116) W. Störmer, Frühes Christentum, S.56.

を果たす礎石になる。ボニファーティウスは大司教について触れなかったが，大司教は太公が兼ねる，と彼が前提していたからか，それともフランク王国宮宰を刺激しないためからか，は定かでない[117]。兎も角，739年当時は，メーロヴィング朝フランク王国に国王は既に不在，カーロリング家宮宰が，王位簒奪のチャンスを窺いつつ王国を牛耳っていた，という時代だった。

E. シュヴァーベンの場合2： 上記4司教区の他に，この頃，若干の司教区がアレマニアやフランケンに生まれる。バイエルンとアレマニアの境界領域にあるアウクスブルク司教座の初期の再構築は特に困難である[118]。古代後期にアウクスブルクには既に司教座はあったが，民族大移動期に雲散霧消したらしい。アウクスブルクには既述のように聖アフラ信仰が見られたが，これは城壁内の特定集団内での事だったらしい[119]。この地域にローマ時代に芽生えたと推定されるキリスト教信仰がアレマニア人にどの程度引き継がれたかは確認できない。アウクスブルク司教座は7世紀にフランク国王ダーゴベルト1世の元で新設或いは再建された，と言われ，文献上把握できる最初のアウクスブルク司教はヴィクテルプ Wikterp（別名ヴィゴ Wiggo 或は Uiggo，在職 738?–772）で，738年にその名が記録されている[120]。アウクスブルク司教区は，アィヒシュテト Eichstätt 司教区の設置（787年？）に伴い同司教区強化のため，798年にズァラフェルト Sualafeld 地域（アルトミュール Altmühl 中流域）を新司教区に割譲する[121]。

F. フランケンの場合2： フランケンでの新司教区誕生はボニファーティウス抜きには考えられない。アングロ・サクソン系宣教者ボニファーティウスはヴィリブロルドの後をうけてフランケンに入って来る。彼は既に

117） Ebd., S.41.
118） Ebd., S.28.
119） Ebd., S.23.
120） Ebd., S.66.
121） 設置年及び割譲年は W. Störmer, Frühes Christentum, S.66 による。LMA, Bd. IX, Sp.211f. によれば，設置年は 745–754 年とされる。

ヘッセン，ティーリンゲン地域でヴィリブロルドに付き随って宣教を行い成果を挙げていた。しかしマイン・フランケン地域での彼の宣教活動はフランケン初の司教座がヴュルツブルクに設置されるまでは明確ではない。だが，彼は若干の尼僧院を建設し，そこを拠点に彼の仲間たちと共に活動したようである。ボニファーティゥスは741/742年には新司教区の設立準備に入り，743年[122]マイン流域を傘下に収める新司教区ヴュルツブルクを設置する（彼は741年に既に新司教にブルクハルド Burkhard を任命していた)。ヴュルツブルク司教区は，西はマインツ，ヴォルムス，シュパィアー Speyer の各司教区と，南はアゥクスブルク司教区と，北は，やはりこの頃に設置されたビーラブルク司教区，エァフルト司教区と境を接した。東方は異教徒の居住区。ヴュルツブルク司教座について付言すれば，ヴュルツブルク司教座教会だけは発足時に既に，王国私有教会（＝嘗ての太公私有教会）25，並びにアゥストリア宮宰カールマン Karlmann（*714?–†754）の僧院1，の合計26もの下位（＝教区）教会を持った[123]。この当時成立したバィエルン，アレマニア，フランケンの司教区としてはこれは唯一の例外である。

アィヒシュテト司教区の誕生については異論が多い。740年，バィエルンに近いアィヒシュテトにボニファーティゥスの援助を得てアングロ・サクソン系宣教師聖ヴィリバルド Willibald（*700?–†787）が僧院を建立する。彼は738年にゲルマンの地に到着していて，741/742年エァフルト司教に任命される。間も無くエァフルト司教区がマインツ司教区に吸収合併されると，アイヒシュテト僧院の司教 episcopus de monasterio Achistadi として活動したようであるが，745年から754年の間にこの僧院は司教座教会になり，アイヒシュテト司教区が設置され，彼がその初代司教に収まる[124]。

G. 僧院建設： アレマニア地域の僧院建設について述べれば，ボーデン湖周辺では，先に触れたザンクト・ガレンとラィヒェナゥの両僧院建立前の7

122） W. Störmer, Frühes Christentum, S.74.

123） Ebd., S.85f.

124） Ebd., S.78 及び LMA, Bd. IX, Sp.212.

世紀半ばに既に，僧院ゼキンゲン Säckingen が建てられ，この僧院がアレマニア最古の僧院と言われる。僧院ザンクト・ガレンは僧院長にオトマーを戴き，747 年頃からベネディクト派僧院になり，同時にカーロリング家宮宰に対する抵抗運動の拠点と化す。カーロリング家から同僧院への寄贈は皆無ながら，アレマニア豪族たちからの寄贈によって僧院は大きな財をなす。アレマニア東部では 740 年頃，つまり，アレマニア太公国が壊滅に向かう時期から，僧院建設ブームが訪れる。これは反カーロリング家を標榜する大僧院ザンクト・ガレンの協力無しには考え難い。ライヒェナゥ僧院に続いて，バィエルンとアレマニアとの境界地域で僧院フィセン Füssen，ケンプテン Kempten が建設される。ケンプテン僧院は建立後もオトマーを始めとするザンクト・ガレン僧院の支援を仰ぐが，750 年頃，宮宰小ピピーンにより僧院長オトマーは逮捕・解職される。751 年小ピピーンは国王権力の奪取に成功しフランク国王になる。752 年以後ケンプテンは，急速にカーロリング家国王僧院へと変質，アルゴィ Allgäu（ボーデン湖とイラー河 Iller の間のアルプス前縁地）への宣教上及び政治上の開発拠点と化し，後に，カール大帝及びその妃ヒルデガルドの建立になる，とされる[125]。

バィエルンでは，僧院ベネディクトボィァン Benediktbeuern，シャーニツ＝シュレードルフ Scharnitz-Schlehdorf，シェフトラン Schäftlarn，ニーダアルタィヒ Niederaltaich（パッサゥ司教区），キームゼー，モーンツェー Mondsee，マッツェー Mattsee，タシロ 3 世の建立になる最後の僧院クレムスミュンスタ Kremsmünster，更にアィヒシュテトが建設される。

フランケンの僧院について述べれば，ヴュルツブルク司教座設置の前に既にマイン河畔のカールベルク Karlberg に尼僧院があり，これがフランケン地域最古の尼僧院とされる。ヴュルツブルク東方約 25km にあるクラインラングハィム Kleinlangheim はフランケンにおける宣教の歴史を物語る土地で，7 世紀半ばに既にその地の墓地に木造教会があった，とされ，その古い

125）Ebd., S.70.

教会を現在の教会がその内部に受け継いでいる，とされる[126]。更に，エルミンリヒ Erminrich 或は Ermanrich が 840 年前後に著した「聖スァロ伝 Vita sancti Sualonis」の内容がきっかけとなって行われた近年の考古学的調査の結果，6 世紀後半にまで遡る教会の存在が確認された。その教会[127]内で発見された小さな石棺は社会的地位の高い人物のもの，と推定されている。現在，この教会は今日のバィエルン，アレマニア地域及びフランケン地域を含むバィエルン，における最古のメーロヴィング朝時代の教会，とされている。フランケンでは 700 年代に入ってから僧院建立が始まる。尼僧院タゥバービショフスハィム Tauberbischofsheim，オクセンフルト Ochsenfurt，僧院はオーデンヴァルト Odenwald のアーモルバハ Amorbach，アンスバハ Ansbach のグムベルトゥス Gumbertus，エルヴァンゲン Ellwangen，フォィヒトヴァンゲン Feuchtwangen，グンツェンハゥゼン Gunzenhausen，シュパルト Spalt，等，枚挙に暇が無い。

序でに，ヘッセン地域の僧院建設について触れれば，ボニファーティゥスはヘッセンのフリツラー僧院の他，フルダ僧院の建設にも関わったが，フルダ僧院はその後，大僧院に発展する。この僧院は，744 年，師ボニファーティゥスの命を受けたストゥルミ Sturm[i]（*700 以後–僧院長 744–†779）によってカーロリング家宮宰の援助を得つつ嘗ての王廷跡地にベネディクト派僧院として建設され，ストゥルミを僧院長に戴いて始まった僧院である。ストゥルミは俗界[128]を惹きつける魅力を備えた稀代の組織者であった。彼は，ヴュルツブルク北方のグラープフェルト Grabfeld 地域に住む豪族らに，宮宰の使者を通して，その領地をボニファーティゥスに寄進させたようである[129]。彼はカール大帝とも良い関係を取り結び，カール大帝はフルダ僧院

126） Ebd., S.86.

127） Ebd., S.86f. 因みにこの教会は現ゾルンホーフェン（Soln＝Sola＋hofen＝Husen）の町にある。

128） 俗界とは聖職者以外の人間・機構を言う。従って，国王を始め，太公，領主，豪族，地主，巷の人間及びそれらに従属する機関を指す。

129） W. Störmer, Frühes Christentum, S.82.

にザクセン人改宗の任を与えると同時に，免除特権[130] Immunität をも付与する。一方，769年，カール大帝のランゴバルド王国王女との結婚話しに際してストゥルミは，フランク国王ピピーンの王妃でカール大帝の母であるベルトラーダ Bertrada の使者に立ち，この婚姻が成立すればランゴバルド王女を通して義兄弟の関係に入るバイエルン太公タシロ3世の了解を得るべく活動し，婚姻成立に導いた人間でもあった。マイン・フランケン地域最大の豪族マトー家 Mattonen もフルダ僧院に多くの寄贈を行った[131]，とのことである。

以上のことから，バイエルンの4司教区が誕生して初めて，アレマニア，フランケンに新司教座も生まれ，多くの僧院・尼僧院が生まれたことが理解されよう。従って4司教区誕生の推進役を務めたボニファーティウスはバイエルン太公オーディロにとって得難い存在であった。オーディロにすれば，ボニファーティウス無しに4司教座設置はできず，更には，弱体化はしていてもフランク王国の影響下からバイエルンを引き離し得なかった。また，ボニファーティウスにすれば，彼が本来的に考えていたフランク王国の教会改革実践にとってバイエルンでの司教座設置活動はその第一歩であった。両者の利害が一致しての共同行動であったが，「ドイツ人の使徒」と呼ばれたボニファーティウスが，ローマとの結合を再度強めんとする宮宰カールマンによって，フランク王国に召還されるや，両者の関係は疎遠になる。

以上，所謂バイエルン地域へのキリスト教の伝播，それら地域における教

130）カール大帝は領域権力の不当介入を危惧して教会や僧院に対して軍事・行政・司法に亙る自主的・独立的意志決定権を保証した。これが免除特権（Immunität）で，現代の「外交特権」に相当する。このような制度を Vogtei（免除特権保護制度），その制度下で保護・監視業務を司る役人を Vogt（免除特権保護司），但し，Vogt の職務内容を捉えて Vogtei と言うこともある。因みに Immunität, Vogt の語源はそれぞれラテン語の immunis（義務の無い・義務を免除された），fautor（促進者・保護者）。

131）W. Störmer, Frühes Christentum, S.83.

会・僧院建設，教会組織化について述べたが，Friedrich Prinz[132] の所論を参考にして，これら諸活動を通時的視点から整理すると以下のようになろう。

宣教の第1期は，アイルランド人宣教の開始までとなる。年代で言えば，ローマ帝国の崩壊からメーロヴィング朝クロードヴィヒ王の孫の時代，即ち4世紀後半から6世紀末までで，キリスト教の伝播は，オルレアン－ディジョン－ローザンヌの線を越えて[133]，トリーァの西方からソンム河の線にまで北上する[134]。ライン東岸の所謂ゲルマンの地は，トリーァを除いて，異教の下，或いはキリスト教アリゥス派信仰の下に置かれたままとなる。この期にバィエルンに姿を現した宣教者としては，5世紀にノーリクム及びラエティアIで活動した，とされるイタリア出身の聖セヴェリーヌスが挙げられよう。

宣教の第2期は，アイルランド・フランク系宣教師の時期で，590年から始まり，メーロヴィング朝王権の勢力範囲内での布教が中心となる。彼らは8世紀に至るまで僧院建設を行う。コルムバーヌスらはフランク王家や地方豪族と連携して精力的に活動する。新たに開拓された地域に踏み込み，メーロヴィング家の侵寇政策と歩調を合わせてアレマニアやバィエルンにその勢いを伸ばし，トリーァやザンクト・ガレンに僧院を建設する。リクセーユの僧たちはボーデン湖に進出する。司教名簿にはゲルマン系の名前が頻出するようになり，フランク王国の中でゲルマンの地が一つの勢力になって行くことが明瞭になる。フランク国王及びカーロリング家宮宰の僧院も増加するが，やがて後者勢力下の僧院がその数を増す。アイルランド・フランク系の僧院は，これらの権力と同調しつつ，宣教を進める。バィエルン関係での宣教者は，聖ガルス，キリアーヌス，エゥスターシゥス，聖エメラームス，となろう。これらの宣教者の活動と重なり合いつつ，次第にアングロ・サクソン系

132) F. Prinz, Grundzüge der Entfaltung des abendländ. Mönchtums, S.122ff.

133) Gerhard Herm, Karl der Große. 4. Aufl. ECON Verlag, Düsseldorf, 1993, S.35.

134) F. Prinz, Gründzuge der Entfaltung des abendländ. Mönchtums, S.122.

宣教へと移って行く。

第3期は，カール大帝登場前の，アングロ・サクソン系宣教師が活躍し出した時期で，アングロ・サクソンのヴィリブロルドによって始まる。彼らの活動の頂点に位置するのがボニファーティゥスである。ライン上流でピルミーヌスが動き，ムルバハ Murbach やラィヒェナゥ僧院を建設する。アングロ・サクソン系宣教師は興隆しつつあるカーロリング家と結びつき，カーロリング家の政治的尖兵となる。ユトレヒト，カィザスヴェァト Kaiserswerth，フリツラー，フルダ，これら僧院はすべてフランク王国の北部・東部の軍事上問題の多い地域に位置する。これらはその後，ザクセン，ティーリンゲン，アレマニア，バィエルンの伝道基地になる。ヴィリブロルド及びボニファーティゥスの活動から，彼らの宣教の成功がカーロリング家及びフランクの豪族の支援と密着していたことが読み取れる。8世紀にはバィエルンは政治的に二つに分かれる[135]。イン河－ザルツァハ河を結ぶ線の西方ではフランク王国系統の僧院，シャルニツ＝シュレードルフ，ベネディクトボィァン，ヴェッソブルン，テーガンゼー Tegernsee，シェフトランが建設され，その線の東方ではアギロルフィング家系統の僧院，レーゲンスブルクの聖エメラム，ニーダアルタィヒ，太公僧院キームゼー，モーンツェー，マツェー，タシロ3世最後の建立になるクレムスミュンスタが建立される。ザルツブルク司教ルペルトゥス，コルビニアーヌス，聖ヴィリバルドがこの時期のバィエルンの宣教者として挙げられよう。

H. 諸種会議： 742年，アゥストリア宮宰カールマンは，聖ボニファーティゥスの助けを借りて，アゥストリア東部地域の宗教上の諸問題を討議する「ゲルマン人会議 Concilium Germanicum」を自ら議長を務めて開催する[136]。これに出席した司教は，ボニファーティゥスの他，ヴュルツブルク，

135） Ebd., S.127 及び，筆者による「再論：タシロ3世」本紀要第32号所載，65ページ参照。

136） 註145の書，S.376-381 及び MGH, Legum Sectio III, Concilia Tom. II, Concilia aevi Karolini I, Pars I, Hannover, 1979. S.1-4. この会議は，殆ど無視され

ビーラブルク，アィヒシュテト，ケルン，シュトーラスブルク Straßburg の司教たちで，教会改革に批判的なマインツとトリーァ Trier，それにバィエルン及びアレマニアの司教たちは欠席する。この両太公国の欠席は，両国が，自領内教会の王国教会制度下への従属を嫌い，各々独自の太公教会制度の確立を志向したことを意味する，と考えて良かろう。聖ボニファーティゥスに見切りをつけた太公オーディロはローマ教皇ツァハリァス Zacharias（在位741-752）にバィエルンにおける教皇特使の更迭を要請し，新特使としてセルギゥス Sergius（生没年等は不詳）が派遣される。このようなオーディロ太公の対応はフランク王国の二人の宮宰カールマンと小ピピーンを刺激する。彼らは，743年，レーゲンスブルクに立て籠もる太公オーディロを攻撃する。今やオーディロは帝国主義的政策を採るカーロリング家に反対する勢力の中心になっていた。その中にはザクセン軍もアレマニア軍もスラヴ人から成る軍も加わっていたし，735年以後カーロリング家宮宰にその領地を散々に痛めつけられていたアキタニア Aquitanien 太公フノァルド Hunoald も，教皇特使セルギゥスも，オーディロに味方した[137]。温和な性格で暴力を否定する教皇ツァハリァスの意を受け，セルギゥスは，太公オーディロの意を体しつつ，両者の激突を防止せんとしたが及ばず，レーゲンスブルク司教と共にフランク軍に捕えられる。教皇は，ボニファーティゥスに再びバィエルン及びフランク王国全域の監督権限を与え，太公オーディロへの配慮を疎んじる。これによりバィエルンの太公教会組織はぐらつく。大司教も教皇特使も居な

ている教会法の完全実施を目的とし，決定された事項は，教会会議の毎年開催，奪われた教会財産の返還請求，堕落した司祭・助祭の禄の没収，聖職者による戦闘行為の禁止・狩猟及び犬を連れての森林徘徊及び大鷹等の飼育の禁止，教会会議の同意を経ぬ司教・司祭の採用禁止，など。開催場所は不明，時期は4月21日頃とされる。その後，教会会議はアゥストリアで743年，ノィストリアで744年に開催されたのみ。主催者カールマンは，カンシュタトの大虐殺（746年）の後，良心の呵責に耐えられず，747年秋頃，政治の世界から身を引き僧院に入る。

137） K. Reindel, Von den Karolingern zu den Welfen, S.165.

いままに存続を続ける太公教会は外部からの影響を受け易く，また傷つき易くもなる[138]。教会組織の頂点に立つ大司教がバィエルンに置かれるのは798年である。このとき既にバィエルン太公国は無く，嘗ての太公教会は既に王国教会になり，司教たちはフランク国王カール大帝に摺り寄る。バィエルン地域の大司教の任を務めたのはザルツブルク司教アルン（*740過ぎ-司教785-大司教798-821）。彼は780年代後半，バィエルン太公タシロ3世が窮地に追い込まれたとき，太公に背を向けカール大帝の陣営に鞍替えした，と言われる人物。彼を大司教に抜擢したのは，無論，カール大帝であったろう。

アレマニアでは，746年，フランク支配に抵抗を続けていた豪族たちが大規模な叛乱を起こす。これに対してアゥストリア宮宰カールマンはカンシュタト Cannstatt における大虐殺で応え，アレマニア太公国は地上から姿を消す。バィエルンは，太公オーディロがその妻ヒルトルード Hiltrud を通して両宮宰と義兄弟の関係にあったためであろうか，アレマニアにおけるようなカーロリング家による壮絶・凄惨な復讐は受けずに済む。

755年或いはその後数年以内に，バィエルン初の教会会議 Synode がアシュハィム Aschheim で開かれる。オーディロ太公死亡当時，未だ7歳だったタシロ3世（*741-在位748-788-†794以後）が成人年齢（「バィエルン部族法典」では12歳）に達していたことも会議開催の条件を整えたのであろう。この種の会議開催のきっかけを与えたのは，しかしながら，ローマ教皇グレゴリゥス2世で，716年に既に教皇は教会組織整備のためにこの種会議の開催をバィエルンとアレマニアの太公・豪族・聖職者に指示していた。当時その指示は実らず，バィエルンにおけるこの第1回教会会議で現実化する。第2回は769/770年にディンゴルフィング Dingolfing で，第3回は771/772年にノィヒング Neuching で夫々開催される。これら教会会議ではバィエルン太公が議長を務めて会議を仕切った。これはグレゴリゥス2世の意に添った会議運営法である。第1回教会会議の会議録によれば，討議内容は教会側か

138） W. Störmer, Frühes Christentum, S.42.

らする太公への嘆願のようなもので，教会の持つ権利の尊重，窃取からの教会財産の保護，教会による十分の一税徴収の際の協力要請，私有教会及び僧院への司教の影響力強化に対する理解要請，賄賂防止のため裁判への聖職者臨席の義務付け，など。その他，バィエルン部族法典の整備・厳守，休日労働の禁止，司教・僧院長・僧・尼僧による教会法に基づく生活態度の尊重，僧院長への僧院規則遵守要請，司牧と修行生活の区別の明確化等の問題が提起された[139]。ここには，聖職者だけでは解決できない問題の多いこと，司祭や修行僧の生活の乱脈振りが内部問題としては既に解決できない段階に来ていること，が示されている。また「アレマニア部族法典[140]」もその第18條で「如何なる司祭或いは司牧に携わる者も教会に属する土地や非自由民を売却する権限を持たない[141]」と規定していることも，聖職者の乱脈振りを示すものとして，注目さるべきであろう。

I. 布教活動： 739年にバィエルンに4司教座が設置されたことにより，バィエルンの東方宣教活動は活発化する。地中海側ノーリクムにはローマ時代から既にキリスト教が根付いていたが，600年直前のアヴァール人の西方侵出に伴って西へと移動して来たスラヴ人により，カランタニア地域の司教

139） Ebd., S.51f.

140） LMA, Bd. V, Sp.1927によれば，Lex Alamannorumには二種の写本が伝えられていて，一つは9・10世紀に写された唯一種の写本にある「アレマニア部族法典約定Pactus Legis Alamannorum」で，もう一つは，初期及び後期カーロリング時代に書かれた凡そ50種の写本「アレマニア部族法典Lex Alamannorum」である。前者の「法典約定」はクロータル2世統治下の7世紀初期に制定された，と推定され，後者の「法典」は，序文ではっきりとアレマニア太公ラントフリドに言及していることから724年から730年の間に作成された，とされる。大抵の「法典」写本に見られる「クロータルの発議により」という表現は後世の改竄，と見なされている。「法典約定」が賠償金一覧表であるのに対して，「法典」には，教会，太公，人民に関わる事柄が記述されるが，内容的には教会の優位が目立ち，太公は単に中央権力の代表者でしかない。この法典は「バィエルン部族法典」とも密接な繋がりを持つ。

141） Clausdieter Schott, Lex Alamannorum, Text - Übersetzung - Kommentar, Schwäbische Forschungsgemeinschaft Augsburg, 1993. S.95.

座は破壊される。東方宣教はバイエルン太公国の政治的・軍事的力量を前提する。740年，アヴァール人によりスラヴ系カランタニア人が攻撃され，彼らがバイエルン太公オーディロに救援を求めたとき，オーディロはカランタニア人を武力で保護する。755年頃，アイルランド出身のザルツブルク司教ヴィルギール Virgil（*700?–司教749–†784）は司教モデストゥス Modestus（生没年等は不詳）をカランタニアに派遣し，宣教の成果を挙げる。772年，タシロ3世は，暴動を起こした同地の異教徒を征圧，カランタニアをバイエルン太公国に吸収し，同地のキリスト教化を終える。太公タシロ3世による769年のプスタ河谷の僧院イニヒェンの建立も，777年の上オーストリアの僧院クレムスミュンスタの建立も，東ティロール及びカランタニア地域の宣教を意図してのことだった。これは，彼の父オーディロが北部山地の開拓と植民を考えて739年にカムミュンスタ，741年にニーダアルタィヒを建立したことから学び，凡そ30年後に彼が同じ政策を実践した，と言えよう。

異教徒に対する布教と言っても，バイエルン太公国の場合と，シュヴァーベン及びフランケンの場合とでは，その内容がまったく異なる。即ちバイエルン太公国の場合は，言わばバイエルン太公国が，政治力及び軍事力を背景に，主体的に異教徒の宣教・改宗に携わったが，後二者の場合は，カーロリング朝フランク国王に命令されての異教徒撲滅であった。即ち，カール大帝から，ヴュルツブルク司教座はその立地条件からしてスラヴ人宣教の任を負わされ，東部フランケン地域の司教座や教会・僧院は困難なザクセン人宣教を担わされる。既述のようにヘーデン2世が719年太公位を追われると，キリスト教の芽生えもティーリンゲンから一掃される。しかしボニファーティゥスがその失地を一気に取り戻す。775年カール大帝が，長期戦の挙句，ザクセン人にフランク王国の高権を承認させることに成功すると，777年のパーダボルン Paderborn の王国会議で，ザクセンを幾つかの宣教区に分割する，と決定される[142]。するとその年，新顔のザクセン豪族ヴィドゥキンド

142） W. Störmer, Frühes Christentum, S.90.

Widukind[143]（*?–777–†785）が登場，大叛乱を指導，フランク王国を打ち破る。この困難な状況下で王国会議の決定を実践するのはフランク王国及びそれに服属した地域の教会・僧院に他ならない。大帝に強制されての，嫌々ながらの，上っ面だけのキリスト教徒への授洗は，心に深く響くものを何も残していなかった。結局，その後の宣教は古くからの経験に支えられた教会に委ねられる。東部フランケン地域の教会・僧院ではマインツ司教座教会及びフルダ僧院が先進的な働きをし，宣教と所領獲得と教会組織建設に取り組む。フルダ僧院長ストゥルミはカール大帝の命を受けてディーメル河畔のエーレスブルクを占領，イルミーンズルを破壊する。フルダ僧院は大量の聖職者を動員して，僧院という名の前進基地をブルンスハゥゼン Brunshausen，ハーメルン Hameln，ミンデン Minden に構築するが，僧院長ストゥルミが死ぬとフルダ僧院はザクセン宣教からはっきり手を引いて行く。ザクセン侵寇の軍事上の中心基地パーダボルンを中心とする東部ヴェストファーレン地域はヴュルツブルク司教座教会の第3代司教ベロヴェルフ Berowelf（在職 768/769–800）に委ねられる。その後，フランク王国によってオスナブリック Osnabrück，ブレーメン Bremen，ミンデン，ミュンスタ Münster，パーダボルン，フェーァデン Verden，ハルバシュタト Halberstadt，ヒルデスハィムの各地

143）LMA，Bd. IX，Sp.74f. によれば，ヴィドゥキンドはヴェストファーレン Westfalen の出身，他のザクセン豪族と一線を画し，パーダボルンの王国会議にも出席せず，キリスト教の洗礼も受けず，フランク王国に媚びて出世しようともせず，カール大帝の拡張政策に反抗する指導者として 777 年に初めてその名が記録される。778 年，カール大帝がスペイン地域で苦境に陥ったとき，彼はザクセンでフランク王国軍を撃退する。782 年のリッペクヴェレン Lippequellen の会議にも顔を出さず抵抗運動を組織，再度フランク王国軍に勝利を収め，784 年フリーゼン人 Friesen とも同盟する。が，785 年カールの反撃に会って降伏，仲間と共にアティニ Attigny で洗礼を受ける。カール大帝のザクセン攻略は 804 年まで継続するが，ヴィドゥキンド降伏後は大きな抵抗は無かったらしい。降伏後は彼は鄭重に扱われライヒェナゥ僧院に入った，ともされるが，詳細不明。その後，彼は伝説化され，ザクセン太公，ザクセン国王，更にオットー朝の血筋の者，ともされる。それを確定するには詳細な分析が必要。

に司教座が次々と設置され，804年，フランク王国は遂にザクセンを併合，ザクセン布教は完了する。

ヴュルツブルク司教座教会に委ねられていたスラヴ人布教は，ベロヴェルフの代になってやっと進捗したようであるが，その彼にパーダボルンの宣教の任務も負わされた結果，スラヴ人布教はザクセン人の場合のようには進行しなかった。788年バイエルン太公国がフランク王国に併合され，796年カール大帝のアヴァール人征討が成功すると，スラヴ人宣教の役目はバイエルンに回ってくる。9世紀前半には地域分担が明確化され，ボヘミア担当はレーゲンスブルク司教区，モラヴィア担当はパッサウ司教区，パンノーニア担当はザルツブルク司教区に決まる[144]。一方，当時の政治状況はどうか，というと，バイエルンはルートヴィヒ2世ドイツ人王（*805?–†876）が統治していた。843年，ヴェルダン条約が締結され，ルートヴィヒ・ドイツ人王の東フランク王国支配が最終的に協定されると，彼は東方政策に積極的に取り組み，845年に14名のボヘミアの諸侯がレーゲンスブルクを訪れ洗礼を受ける，という政治的・宗教的成果を挙げはするものの，カーロリング朝時代のスラヴ人宣教は完全な失敗に終る。しかしオットー2世治下の975/976年にはボヘミア及びモラヴィアに司教座が，オットー3世治下の1000/01年にはポーランド及びハンガリーに大司教座が設置されるに至って，東方植民は一段落する（ボヘミア及びモラヴィアの司教座はマインツ大司教座に組み込まれる）。

J. 聖権と教界浄化： 次ぎに，当時のキリスト教界が抱え込んだ諸問題，シモニア（聖職売買）とニコライティズム（妻帯・蓄妾）について述べるが，

---

144) Egon Boshof, Die Zeit von 798 bis 1046, in: Walter Brandmüller (hg.), Handbuch der bayerischen Kirchengeschichte, Bd. I, 1, St. Ottilien, EOS-Verl., 1998. S.124ff. において失敗に終る状況が詳述されている。尚，Boshof は，この当時を記録した信頼できる文献数は少なく（本稿註6の書 Conversio Bagoariorum et Carantanorum がその代表格），偽作（例えば Große Tradition der Passauer Slawenmission in Mähren 及び Ein Schreiben Theotmars）の存在を指摘して，注意を促している。

その前に当時のキリスト教界の会議体について概述しておく。既に触れた教会会議ではキリスト教カトリック派の教義を始めとして教会・僧院を巡るあらゆる問題が討議される。教会会議には，ローマ教皇が開催する公会議 Synode の他，総合教会会議 Generalsynode，全国教会会議 Nationalsynode，大司教座教会会議 Provinzialsynode，司教座教会会議 Diözesansynode，国王が開催し俗人も参加する王国教会会議 Reichssynode，領域太公が議長を務め俗人も参加する教会会議 Synode 等があるが，フランク国王が開催する王国会議 Reichsversammlung，Hoftag 等においても宗教問題は，組織問題・異教徒宣教を含めて，様々に討議された。この時代においては，従って，宗教問題は優れて政治問題であり，聖俗の区別を持たない会議体，或いは Synode という名称は与えられていないが同趣旨の俗人主催の会議体で「宗教問題」が論じられて当然で，逆に，聖権主催の会議体で聖権が俗権の問題に介入することも稀ではなかった。既に見たようにオットー朝では，敬虔なカトリック教徒で国王のオットー3世は，教権（＝聖権）を政権（＝俗権）に従属させ，聖俗に亙る全キリスト教世界に君臨しようとしていた。聖俗混淆，ここに既に政権及び教権が抱えた問題の大きさ，及びその解決の難しさが垣間見られよう。そうして遂に，武力を持たない聖権側からする具体的対抗策は，聖俗の対決を鮮明にしつつ，所謂「叙任権闘争 Investiturstreit」に発展する。

ここで「叙任権闘争」に対する筆者の基本的捉え方を述べて置く。この対決への従来のアプローチは，教会改革問題は，聖権と俗権が争った叙任権問題とは関わりが無く，前者はキリスト教界の内部問題，後者は聖・俗に関わる国家理念の問題，と，二者を峻別した。しかし，この二つの問題は密接な繋がりを持つ，と考えてよい。その理由として挙げられる一つは，もしキリスト教界そのものが腐敗しているなら，聖権の発言は巷間の理解を得られないこと，二つとしては，聖権が，教界浄化への努力過程で，その根本原因は俗権による高位聖職者の叙任にある，と認識し，更にその認識に巷間の一定の理解が得られた場合，俗権による叙任行為そのものが大きくクローズアッ

プされて当然で，教界浄化は直線的と言ってよいほどに叙任権問題に密着して来ること，が挙げられる。このことは特に東フランク王国に当てはまる。と言うのも，東フランク王国においては，所謂「王国（＝帝国）教会制度」の元，教界は王権（＝帝権）に組み込まれていたからである。従って，筆者は，聖職者の倫理改革並びに叙任権闘争を一体のものと理解し，これら長期に亙る変動を「グレゴリゥス改革 Gregorianische Reform」という概念のもとに全体的に捉えて，教会改革問題から叙任権闘争へと接近する。

ボニファーティゥスは宣教面・教会組織面で大きな成果を挙げたが，彼は更にキリスト教界の内部改革に対してもエネルギーを注ぐ。742年半ば頃，彼はローマ教皇ツァハリァス（在位 741-752）に書面を送り，その中でフランク王国教界の腐敗を大要，以下の如く批判的に報告する：「数十年来この方，当地では教会規律が踏みにじられ，古老の言によればもう80年以上にも亙って教会会議は開催されていません。今や大部分の司教座は財産目当ての俗人や，淫行に耽り暴利を貪る闖入者に委ねられています。助祭にしても，4・5人或いはそれ以上の情婦を抱える者が居るかと思えば，司教にしても，飲酒，狩猟に明け暮れする者，喧嘩っぱやい者も居ます。そのような者たちが聖書を民衆に読み聞かせ，恥じることなく自分は助祭だ，と言っています[145]」目を覆いたくなる現状を知ったボニファーティゥスであればこそ，粗暴な人士の住む土地でのキリスト教の定着に生涯を賭けて，その理想を追求し得たのであろう。

教皇ツァハリァスは，フランケン，ヘッセン及びティーリンゲンに司教区が設置され終わった743年頃，13名の支配的フランケン人及び全ての豪族・民衆と自由民・非自由民に宛て，司牧に関連して教会規律を遵守するよう求める書簡を出す。その中で彼は，教会を建立した場合，その司祭には司

145) Reinhold Rau (neu bearbeitet), Briefe des Bonifatius. Willibalds Leben des Bonifatius, in: Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Freiherr vom Stein-Gedächtnisausgabe, Bd. IVb, Darmstadt, Wissenschaftl. Buchhandlung, 1968. S.142ff.

教がその素性・行状を確認した者だけを採るよう，強く求める。その理由として，合法的な承認を得ていない司祭が私有教会の建立者により司牧のために採用されているが，彼らの多くは元非自由民で主人の許から逃げて来て虚言を弄する者たちであること，を挙げる。更に教皇は，聖職者たる者，狩猟にうつつを抜かし賭博に耽るとは何事ぞ，とも述べる[146]。この書簡から，当時，聖職者の任用が如何に杜撰であったか，聖職者の品性が如何に劣等であったか，が，読み取れる。

916年9月20日，シュヴァーベンのリース地方（本稿98ページ参照）のホーェンアルトハィム Hohenaltheim にあるヨハネ教会 Johanniskirche で，カーロリング朝フランク王国断絶後，東フランク王国最初の総合教会会議 generalis synodus が開催される[147]。その地の司教ペトルス Petrus（生没年等は不詳）が教皇使節として議長を務めた，とされる。参加者については明確ではない。シュヴァーベン，フランケン，バィエルンの司教たちは参加したが，「総合」と銘打った会議であったものの東フランク王国全司教のほぼ半数は欠席した模様。軍統率力にも国王としての権威にも欠けた[148]東フランク王国国王コンラート1世 Konrad I.（在位911-918）は出席したらしい，とのこと。議長ペトルスは先ずローマ教皇ヨハネス10世 Johannes X.（在位914-928）の教界の悪弊是正を求める書簡を読み上げる。この書簡に基づき，会議は，教会財産及び使用人の保護，聖職売買行為の禁止，疑わしい司教等の訴追，十分の一税納税拒否者への破門示唆，司教・聖職者による破門者との交際及び僧職売買行為に対する懲戒を決定し，東フランク王国擁護のための諸措置の具体策として，1. 国王の生命及び支配権を狙って謀反を起こす者は永久に破門されること，2. 国王に対して為した誓約に背く者は厳しく処断されること，3. 上記の罪を犯し本教会会議に参加を求められたにも拘

146） W. Störmer, Frühes Christentum, S.87f.

147） Ebd., S.140 及び MGH, Concilia Tom.VI, Pars I, Hannover, 1987, S.1-40.

148） 渡部治雄，フランク時代，in：成瀬治・他編，世界歴史大系・ドイツ史1－先史～1648年，山川出版社，1997年，101ページ。

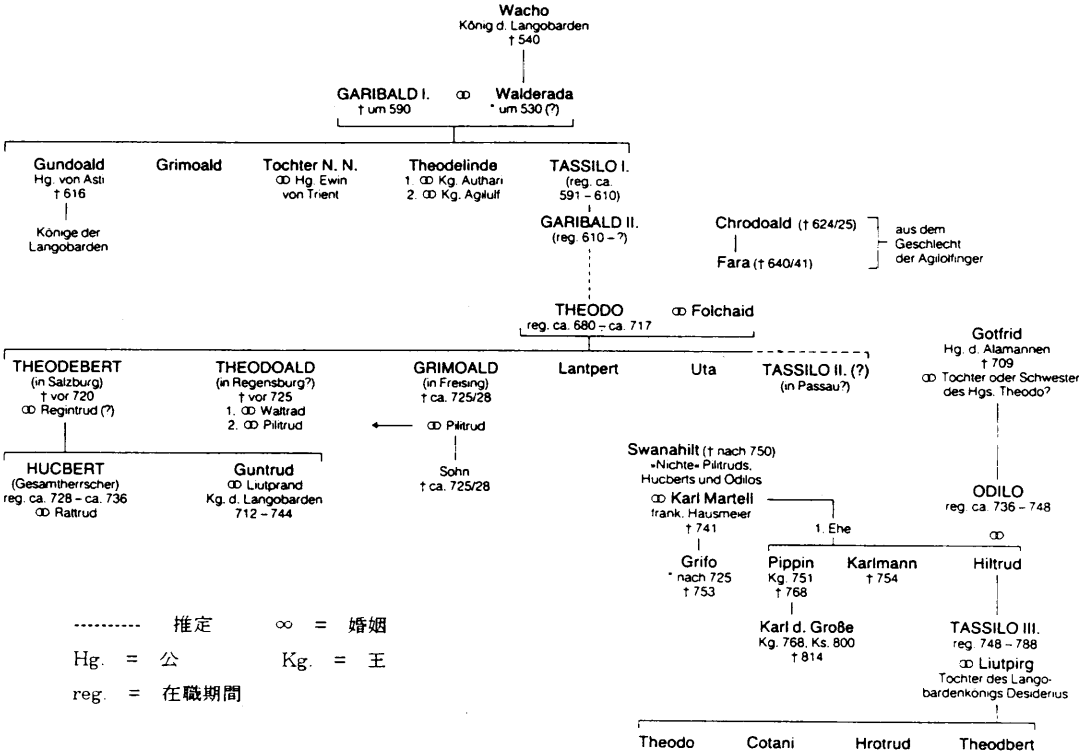
らず欠席したシュヴァーベンのエルヒァンガー伯，ベルトルド伯，ブルヒァルド Burchard（後のシュヴァーベン太公ブルヒァルド2世，在位917-926），豪族アルノルド Arnold（世没年等は不詳）は管轄司教の許に出頭して釈明しこの会議が決定した罪を償うこと，それを拒否した場合は教皇の指示により破門に処すこと，4. バイエルンのアルヌルフ（＝アルヌルフ悪玉公，コンラート1世の義子）とその弟ベルトルド及びその一派は916年10月9日レーゲンスブルクで開催される教会会議に出席し贖罪すること（この教会会議は開催されなかった模様[149]），を決定した。当時，アルヌルフ悪玉公はコンラート1世の攻撃を受けハンガリー人の許に逃げ込んでいた以上，アルヌルフ悪玉公についてこれら決定の実効性が乏しかった。しかしアルヌルフ悪玉公の叔父でコンラート1世の義兄弟でもあるエルヒァンガー伯とベルトルド伯は917年1月21日コンラート1世の恣意により処刑されてしまう。二人の伯は総合教会会議当時，既に拘束されていたのであろう。このような事態の流れを考慮すれば，これら一連の決定の狙いは，教権側が，教界浄化を謳いつつ，反逆者断罪の教会法上の根拠を俗権に対して与えることによって問題解決の主導権を握り，併せて俗界及び聖界の混迷を収拾し政権をリードしつつ，教権の優位を世に明示することにあった，と言えよう。（以下，次号）

本稿はミュンヒェン大学教授・バイエルン史研究所所長 Prof. Dr. Walter Ziegler 氏のご好意と同研究所の便宜提供を受けて成ったものである。特記して感謝の意を表したい。またグレゴリウス改革について筆者に助言を下さったミュンヒェン大学名誉教授 Prof. em. Dr. Wilhelm Störmer 氏，及びエァランゲン大学文学部助手 Dr. Andreas Otto Weber 氏の両氏にも厚く御礼申し上げる。

2001年6月4日　　ミュンヒェンにて　　筆者

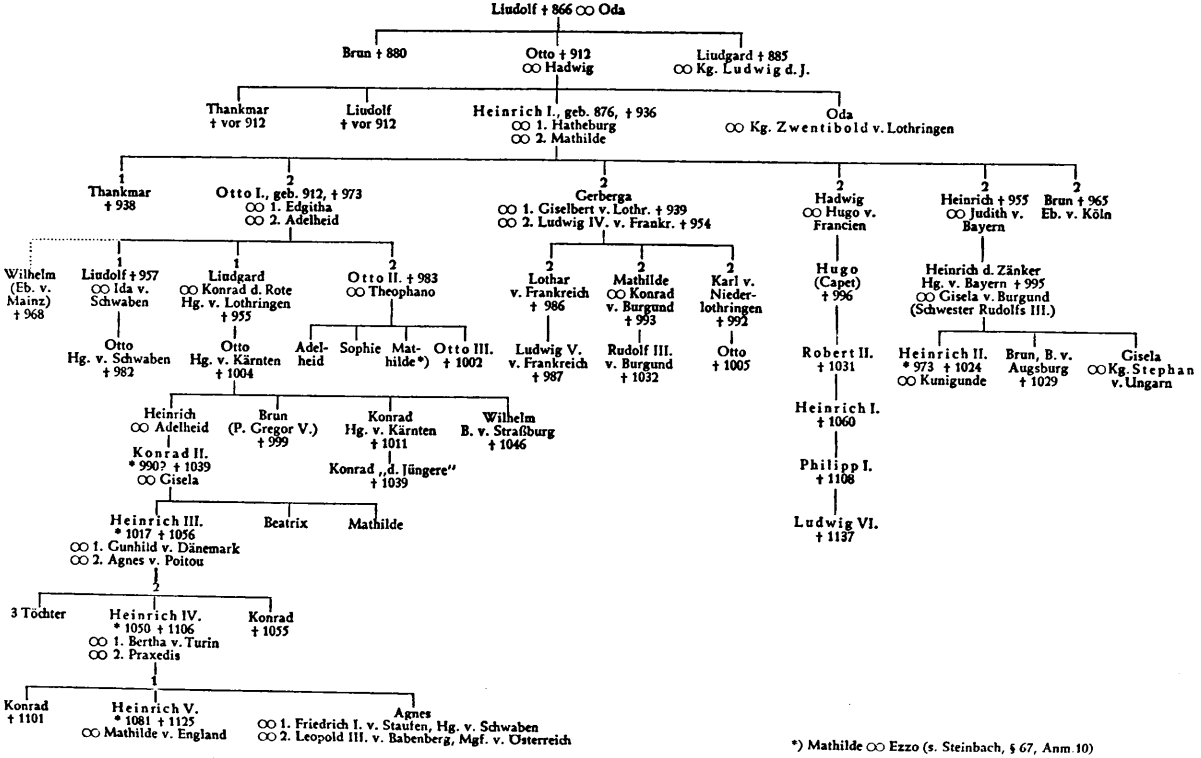
149） MGH, Concilia Tom.VI, Pars I, Hannover, 1987, S.2.

アギロルフィング家系図　Wilfried Menghin, Frühgeschichte Bayerns, Stuttgart, Theiss, 1990. S.78.

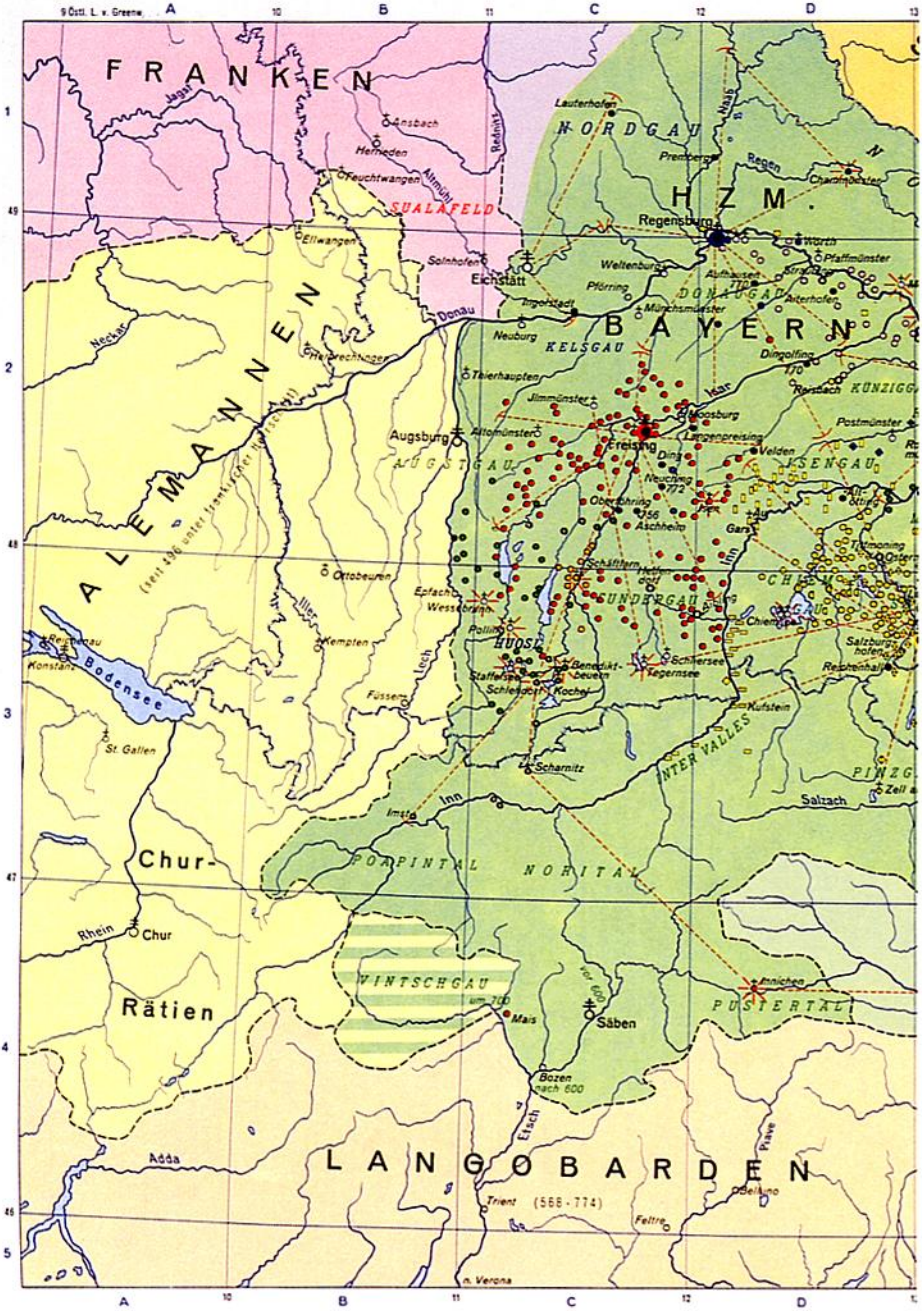


オットー朝とザーリァ朝系図

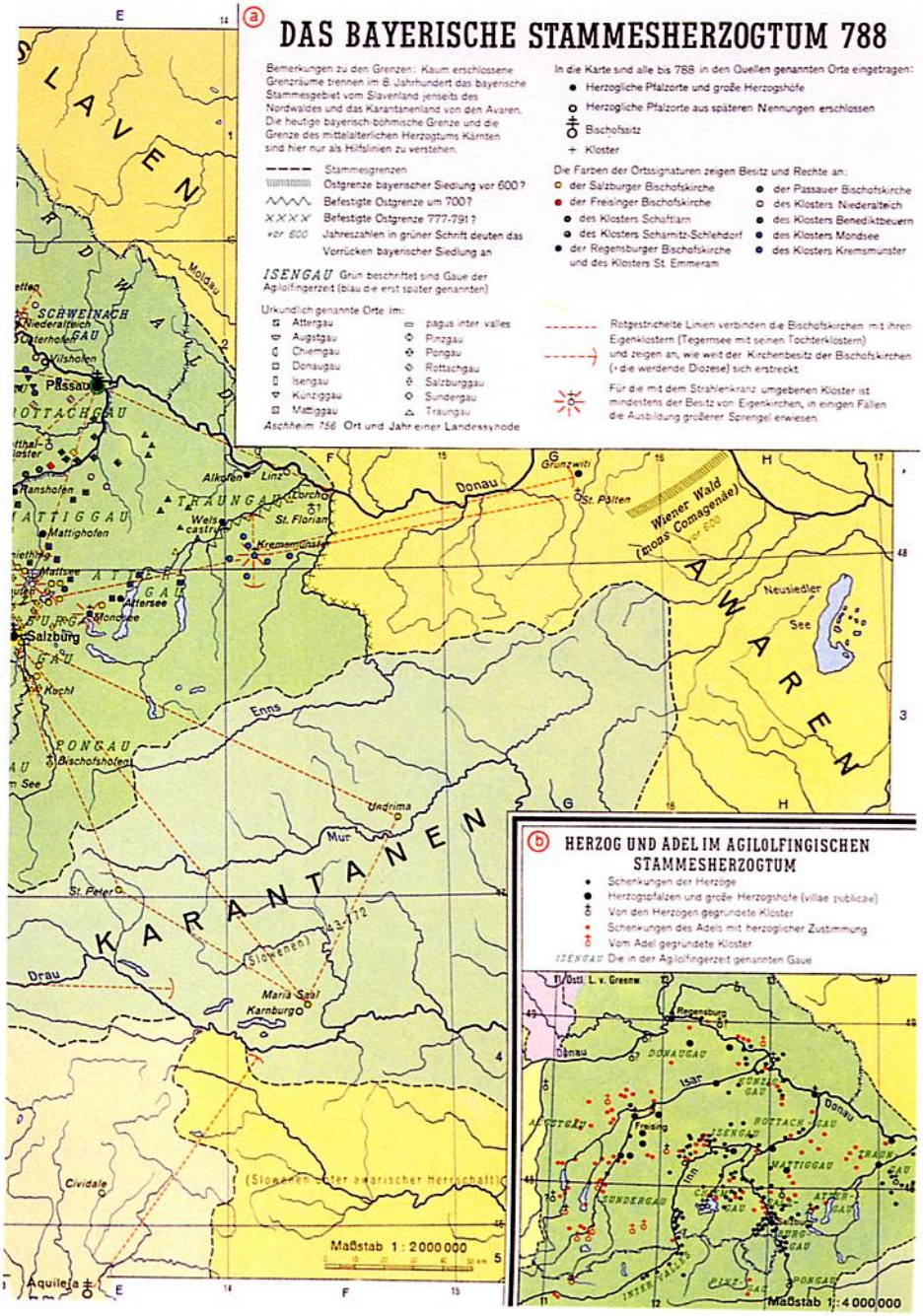
Herbert Grundmann (hg.), Handbuch der Deutschen Geschichte/Gebhardt, Stuttgart, Klett, 1981. Bd. 1, S.838



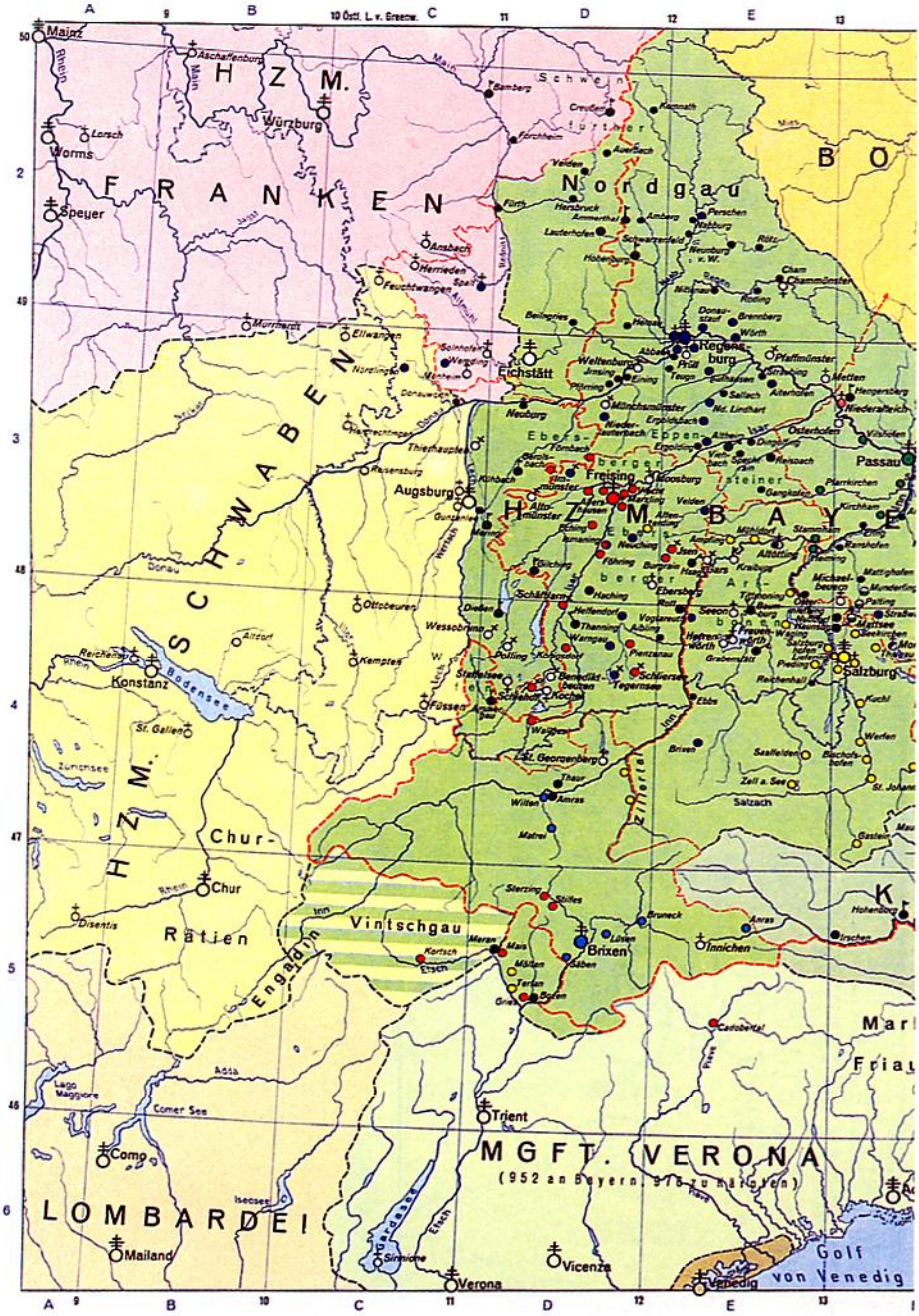
*) Mathilde ∞ Ezzo (s. Steinbach, § 67, Anm. 10)



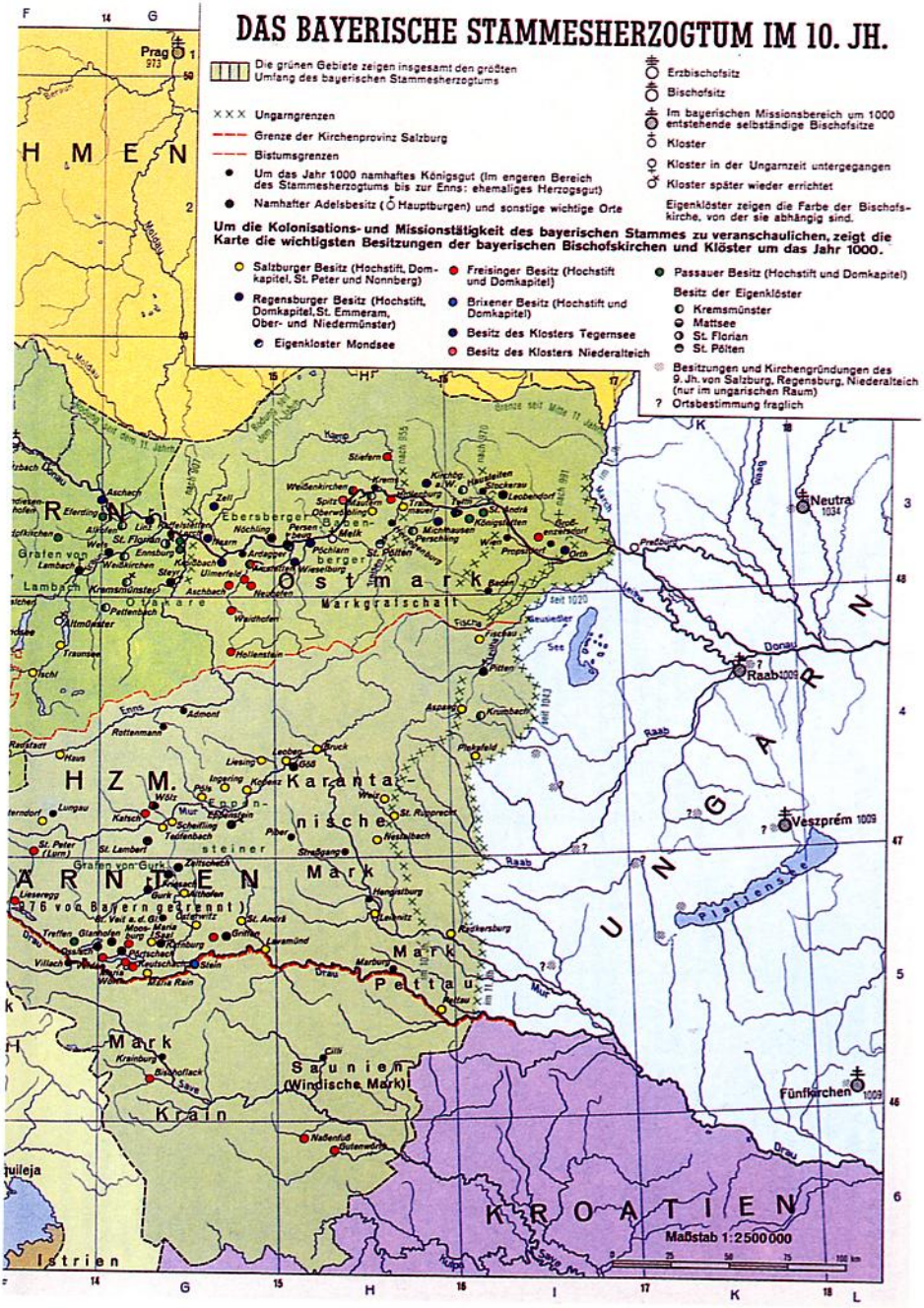
788年のバイエルン部族太公国



Max Spindler, Bayerischer Geschichtsatlas, München, Bayer. Schulbuch-Verlag, 1969. S.14.

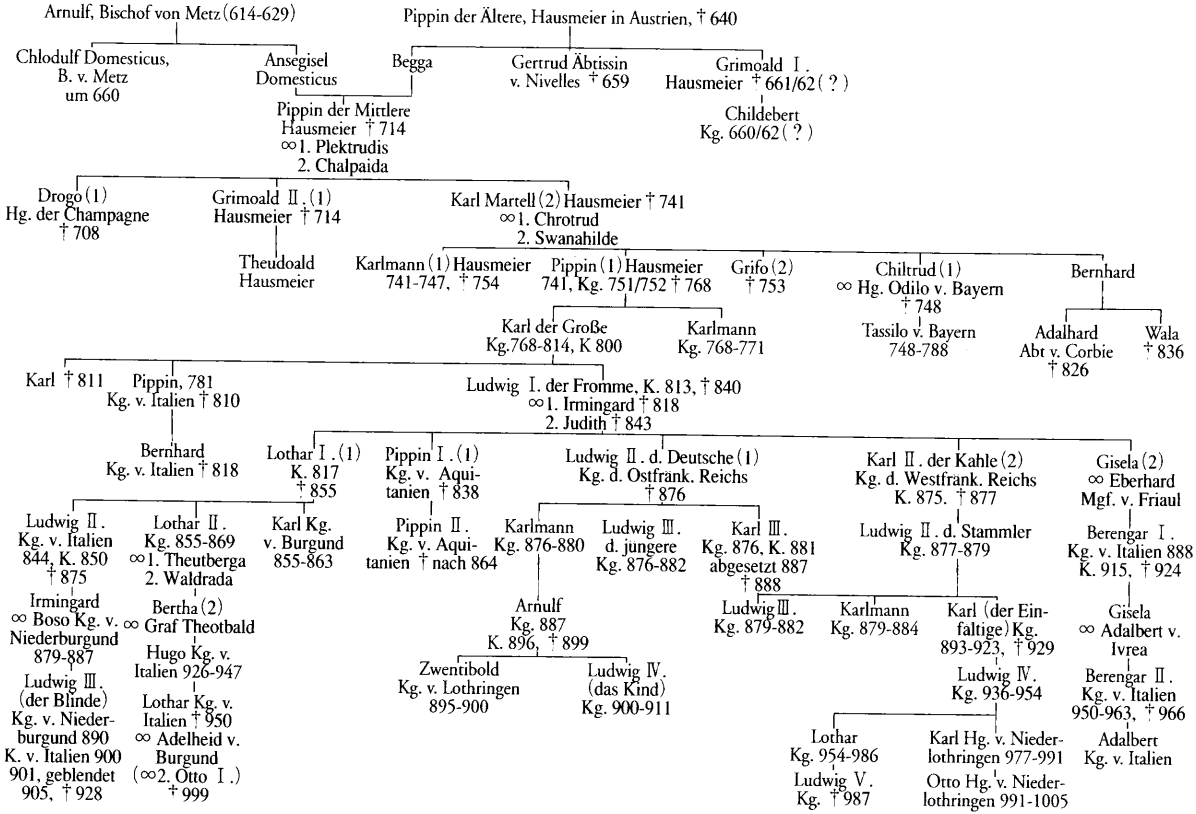


10 世紀のバイエルン部族太公国



Max Spindler の書，S.15.

カーロリング家系図　Herbert Grundmann の書，S.837.



バィエルンの統治者

Max Spindler(hg.), Handbuch der bayerischen Geschichte, München, Beck, 1981. Bd. 1, S.668.

アギロルフィング家　最後の二人の公

? -748 Odilo
748-788 Tassilo Ⅲ.

カーロリング系　代官

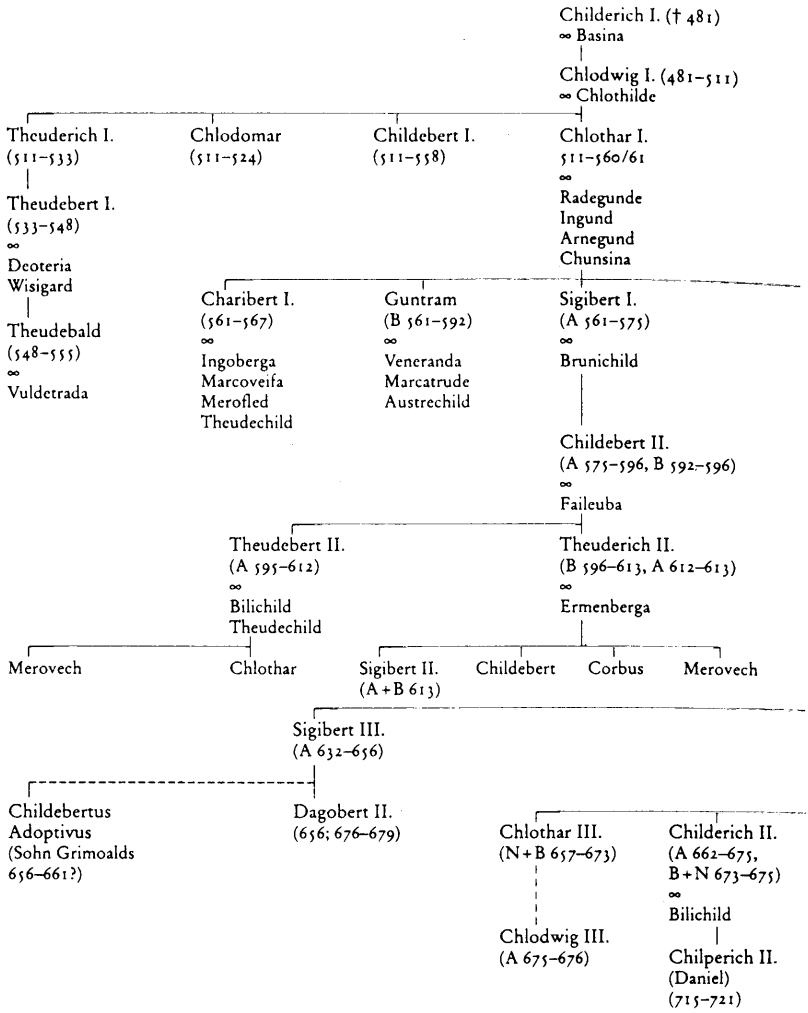
788-799 Gerold Ⅰ.
799-818 Audulf
? -861 Ernst Ⅰ.
? -895 Engildeo Ⅱ.

ルーィトポルド家（本稿132ページ参照）

歴代の公（1070年迄）

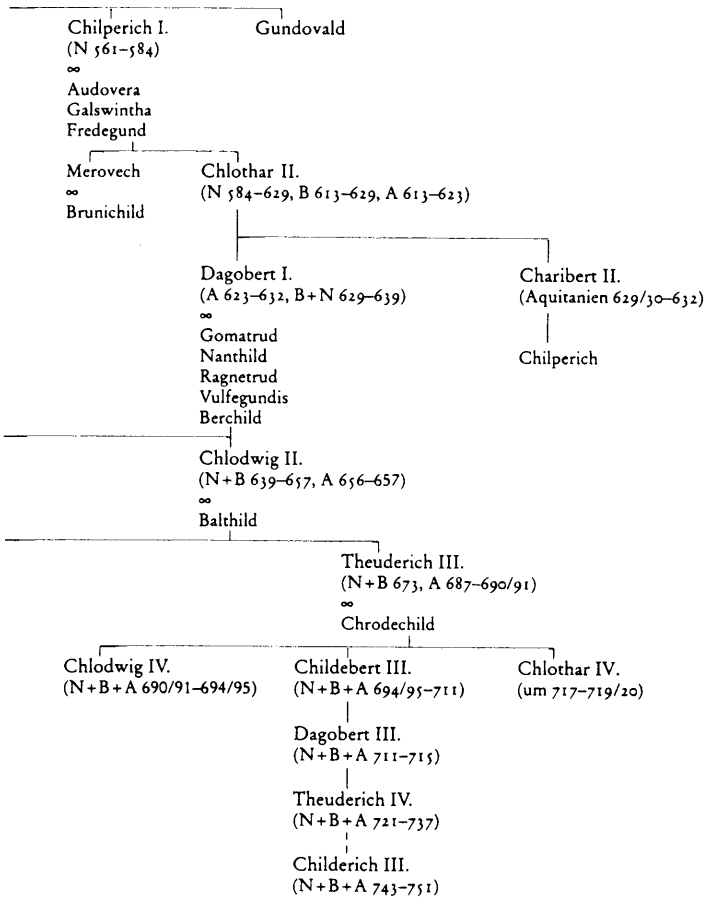
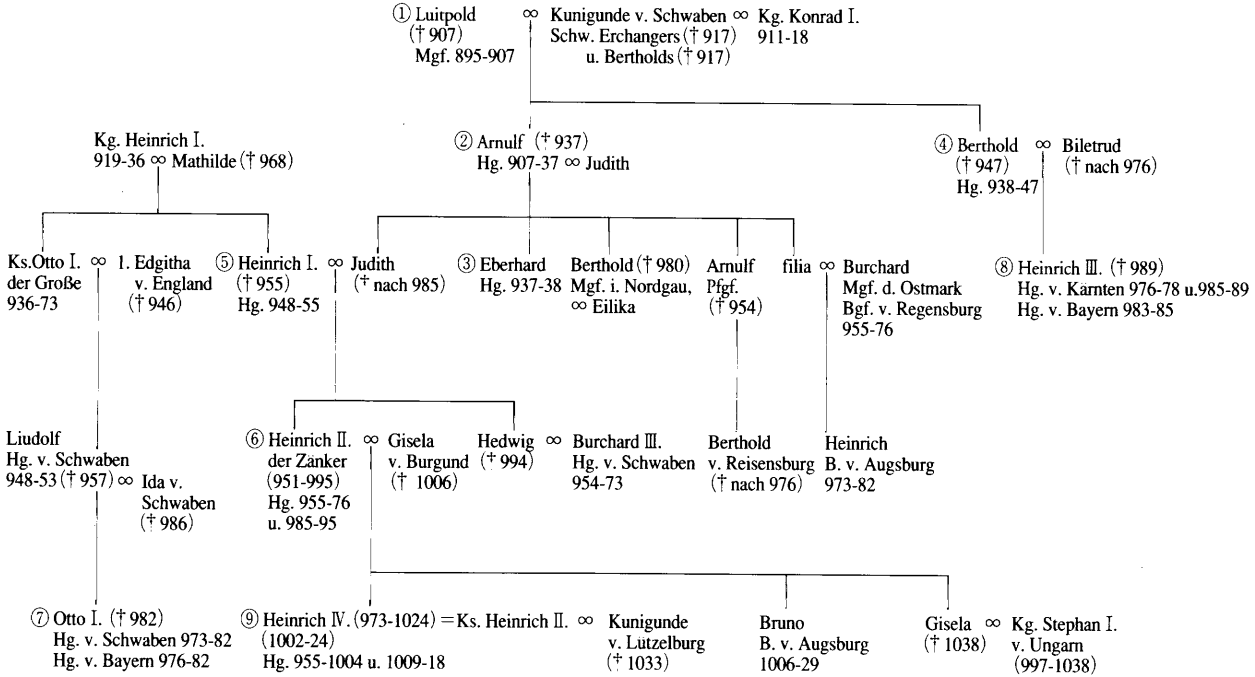
995-1004 Heinrich Ⅳ.（＝Ks. Heinrich Ⅱ. der Heilige）
1004-1009 Heinrich Ⅴ. von Lützelburg
1009-1018 Heinrich Ⅳ.
1018-1026 Heinrich Ⅴ. von Lützelburg
1026-1027 Konrad（＝Kg. Konrad Ⅱ.）
1027-1042 Heinrich Ⅵ.（＝Ks. Heinrich Ⅲ）
1042-1047 Heinrich Ⅶ. von Lützelburg
1047-1049 Heinrich Ⅵ.
1049-1053 Konrad Ⅰ. von Zütphen
1053-1054 Heinrich Ⅷ.（＝Ks. Heinrich Ⅳ）
1054-1055 Konrad Ⅱ.
1055-1061 Agnes, Gem. Ks. Heinrichs Ⅲ.
1061-1070 Otto von Nordheim

B.＝司教　Gf.＝伯　Gem.＝妻　Hg.＝公　Kg.＝王　Ks.＝皇帝
Mgf.＝辺境伯　nach＝以後　Pfgf.＝宮廷伯　Schw.＝姉妹　T.＝娘
∞＝婚姻　†＝没年


Childerich I. († 481)
∞ Basina
Chlodwig I. (481–511)
∞ Chlothilde
Theuderich I.
(511–533)
Chlodomar
(511–524)
Childebert I.
(511–558)
Chlothar I.
511–560/61
∞
Radegunde
Ingund
Arnegund
Chunsina
Theudebert I.
(533–548)
∞
Deoteria
Wisigard
Theudebald
(548–555)
∞
Vuldetrada
Charibert I.
(561–567)
∞
Ingoberga
Marcoveifa
Merofled
Theudechild
Guntram
(B 561–592)
∞
Veneranda
Marcatrude
Austrechild
Sigibert I.
(A 561–575)
∞
Brunichild
Childebert II.
(A 575–596, B 592–596)
∞
Faileuba
Theudebert II.
(A 595–612)
∞
Bilichild
Theudechild
Theuderich II.
(B 596–613, A 612–613)
∞
Ermenberga
Merovech
Chlothar
Sigibert II.
(A + B 613)
Childebert
Corbus
Merovech
Sigibert III.
(A 632–656)
Childebertus
Adoptivus
(Sohn Grimoalds
656–661?)
Dagobert II.
(656; 676–679)
Chlothar III.
(N + B 657–673)
Chlodwig III.
(A 675–676)
Childerich II.
(A 662–675,
B + N 673–675)
∞
Bilichild
Chilperich II.
(Daniel)
(715–721)

メーロヴィング家略譜　Patrick J. Geary, Die Merowinger, München, Beck, 1996. S.242f.

A = アウストリェン国王
B = ブルグンド国王
N = ノイストリェン国王



ルーィトポルド家略譜　Max Spindler の書，S.669.